http://www.music-communication.com

神戸女学院大学　東京音楽大学　昭和音楽大学

音楽系３大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 25 年度 活動報告書

- 平成 25 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」
- 平成 25 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定
- 3 大学実習報告
- 英国ギルドホール音楽院への学生派遣

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

Kobe College
Showa University of Music
Tokyo College of Music

音楽の力、伝えるスキル。

文部科学省選定　音楽系3大学による共同プロジェクト

音楽系３大学による共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 25 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・研究会・平成 25 年度活動概要 …… 3

Ⅰ．平成 25 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」
1．第１回　ワークショップの学習論 …… 4
2．第２回　アートな学び …… 6
3．第３回　音楽とメディアのデザイン …… 8
4．第４回　音楽ワークショップの実践 …… 10
5．第５回　プレイフル・シンキング …… 12
6．第６回　ギルドホール音楽院のリーダーシップ教育とその考え方 …… 14
7．第７回　東京音楽大学 実習報告会 …… 16
8．第８回　昭和音楽大学 実習報告会 …… 16
9．第９回　神戸女学院大学 実習報告会 …… 17
10．第10回　総括 …… 18

Ⅱ．平成 25 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定 …… 21

Ⅲ．３大学実習報告
1．音楽ワークショップ「ようこそ音戯 (おとぎ) の島へ♪」…… 27
2．東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座　特別セミナー
音楽ワークショップ「ワンダー・アンサンブル」…… 28
3．音楽ワークショップ集中研修ならびに
第４回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」…… 30
4．「音楽の贈り物　～みんなでつくる笑顔の時間 (ひととき) ～ in 昭和音楽大学 2013」…… 34

Ⅳ．英国ギルドホール音楽院への学生派遣 …… 36

おわりに …… 40

はじめに

東京音楽大学・昭和音楽大学・神戸女学院大学音楽学部の音楽系３大学による連携事業「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、今年度が５年目、文部科学省の支援（平成 21 ～ 23 年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」採択）が終了して２年目に当たります。この取組は、音楽系の３つの大学がそれぞれの特性を生かしながら、音楽を生かして社会で活躍できる人材、音楽のもつ本来の力を意識し、人々を結び、人々と結び合うためのコミュニケーション・ツールとして音楽を駆使する能力と見識をもつ人材、すなわち「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざすものです。

今年度も、大学間をインターネット･ビデオ会議システムによって繋いで行なう共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」を開講し、各界講師のユニークな講義に加えて、３大学の学生による実習の成果発表やディスカッションが活発に行なわれました。

加えて９月には東京で、11 月には神戸で音楽ワークショップ集中研修を行ないました。今年度は自己資金での開催を余儀なくされたため、東京は国内講師２名、神戸は海外からの招聘講師１名のみという形での実施となりました。また昨年度に引続き、今年度も２月にロンドンでのワークショップ研修に関東と関西から合わせて６名の学生を送り出すことができたのは大きな喜びです。

これらの活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

本報告書は、今年度の活動内容をまとめたものです。音楽・芸術・教育に関わる方々にご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

平成 26 年３月

音楽系３大学連携事業 取組担当者
津上智実
（神戸女学院大学音楽学部・教授）

※開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座Ⅰ・Ⅱ（東京音楽大学）
音楽コミュニケーション①・②（昭和音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

３大学連携事業

教員・スタッフ（平成 26 年３月現在）

東京音楽大学	武石　みどり	東京音楽大学音楽学部　教授
	村中　洋子	東京音楽大学音楽学部　教授
	上條　浩史	東京音楽大学音楽学部　連携センタースタッフ
	高橋　英美	東京音楽大学音楽学部　連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上　智実	神戸女学院大学音楽学部　教授
	松田　彩起子	神戸女学院大学音楽学部　連携ルームスタッフ
	永吉　りう子	神戸女学院大学音楽学部　連携ルームスタッフ
	木村　真理子	神戸女学院大学音楽学部　連携ルームスタッフ
昭和音楽大学	武濤　京子	昭和音楽大学音楽学部　教授
	赤木　舞	昭和音楽大学音楽学部　専任講師
	佐藤　良子	昭和音楽大学音楽学部　助教

３大学連携研究会

メンバー（平成 26 年３月現在）

東京音楽大学	武石　みどり
神戸女学院大学	津上　智実
昭和音楽大学	武濤　京子、赤木　舞、佐藤　良子

平成 25 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、３大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成 25 年４月 17 日（水）	発信校：東京音楽大学
第１回：平成 25 年５月 15 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第２回：平成 25 年５月 29 日（水）	発信校：東京音楽大学
第３回：平成 25 年６月 12 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第４回：平成 25 年６月 26 日（水）	発信校：東京音楽大学
第５回：平成 25 年７月 10 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第６回：平成 25 年 10 月 30 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第７回：平成 25 年 11 月６日（水）	発信校：東京音楽大学
第８回：平成 25 年 12 月４日（水）	発信校：昭和音楽大学
第９回：平成 26 年１月８日（水）	発信校：神戸女学院大学
第 10 回：平成 26 年１月 15 日（水）	発信校：東京音楽大学

その他、各大学で実習の準備・リハーサル・本番・振り返り（計４コマ）を実施した。（年間計 15 コマ）

●その他の活動

音楽ワークショップ「ようこそ音戯の島へ」：平成 25 年７月 22 日（月）～ 23 日（火）於：東京音楽大学
特別セミナーと音楽ワークショップ「ワンダー・アンサンブル」：
平成 25 年９月 21 日（土）～ 22 日（日）於：東京音楽大学
音楽ワークショップ集中研修と第４回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」：
平成 25 年 11 月 13 日（水）～ 16 日（土）於：神戸女学院大学
「音楽の贈り物～みんなでつくる笑顔の時間～」平成 25 年 12 月 15 日（日）於：昭和音楽大学
英国ギルドホール音楽院への学生派遣参加：
平成 26 年２月 13 日（木）～２月 25 日（火）於：ロンドン市東部

平成25年度　第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップの学習論」
講　師	苅宿俊文（青山学院大学教授）
実施日時	2013年5月15日（水）18:30～20:00
実施場所	昭和音楽大学　南校舎C511階段教室
講座の概要	3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の平成25年度の第1回目は、昭和音楽大学からの発信で、青山学院大学教授の苅宿俊文氏を講師としてお招きして実施した。 講義では、まず「ワークショップ」と「アウトリーチ」の違いについて問いかけがなされた後、「ワークショップ」について、＜方法＞＜分類＞＜前提条件＞＜場面＞など、さまざまな観点からの定義づけが示された。そして、これらの定義を、「いろいろあって分からない」とするのではなく、「必要に応じて使い分けて考える」ことが大切、かつ有効であると強調された。 次に、教育学の観点から、1．できる＝行動主義学習観、2．わかる＝認知主義学習観、3．分かち合う＝社会構成主義学習観、という「3つの学習観」が具体的な例とともに説明された。最初の2つの学習観（できる、わかる）が「獲得した知識の量」という「教え手側の意図の達成度合い」を測るのに対して、3つめの「分かち合う」は、他者との相互作用を通して意味を生成していくという「参加型の学習」であり、「経験の質」という「学び手側の実践の納得度合い」を問うものであること、そして、ワークショップは、この3つめの学習観に根差すものであることが説明された。 さらに、今、日本の学校教育の場でワークショップが必要となっていることについて、文部科学省言語力育成協力者会議で定義された「コミュニケーション能力」についての資料や具体的な取り組み（「児童生徒のコミュニケーション能力に資する芸術表現体験事業」）の紹介などをもとに論じられた。また、学校でワークショップを実施する際に、その特徴や利点を、学校の先生や関係者にしっかりと説明できることが大切であることが述べられ、質疑応答を経て、講義を終了した。

〈学生のことば〉

・音楽やワークショップを通して自分の価値を見出し、自己表現をすることが大切だと思った。正しい答えは自分の中にあり、間違いがない問いを知るというキーワードが印象に残った。何が正しいか、違うかを判断する力を身につけ、この受講をきっかけにもっと心を表現する力を身につけたい。（昭和 / サクソフォーン /1年）

・「自分が何かをすることに正しい答えはない」という言葉が印象に残りました。どれが正しいとかを気にせずに、自分が正しいと思っているやり方を音楽につなげて、自分らしい音楽活動をしたいと思いました。（昭和 / サクソフォーン /1年）

・ワークショップを学問として、定義を考えることが今まで無かったので、とても刺激となった。今までいくつかのワークショップに参加してきて、共通して言えることは「楽しい」といった感情があるということだ。「即興性」と「身体性」の重要さがとても身に染みた。
（昭和 / アートマネジメント /2年）

・難しい内容のはずなのにとても分かりやすく頭に入りました。単に仲間づくりではなく、お互いの価値観などを共有することによって、関係をつくることがいかに大切なことかが分かりました。グローバル社会がワークショップを求めていることを知り、ワークショップができる人材になりたいと思いました。
（東京 / ピアノ演奏家コース /3年）

・ワークショップの定義をこれから活動を通して自分なりに説明できるようになりたいと思いました。難しい内容であったとは思いますが、自分なりに納得する学びの時間であったと思います。
（東京 / ピアノ /4年）

・演奏もできる教育者を目指しているので、何をどう考えるかということを今日学び、将来、実際に教える立場になった時、学内でのワークショップなどで活かしていきたいです。
（東京 / ピアノ演奏家コース /3年）

・ワークショップについてあまりよく知らなかったけれど、明確なワークショップの定義を知り、ワークショップが他人に与える役割がどれほど大切かということが分かりました。教科の授業では正解を知り、暗記していくことが正しいとしていたが、ワークショップは自分の中にある答えが正解であることに気づき広めていくことだと知りました。せっかく音楽にかかわっているので、演奏会で演奏するという伝え方ではなく、もっと他の伝え方もあって、それが社会貢献になるのだなという新しい音楽のカタチを広めていきたいと思いました。（神戸 / フルート /2年）

・2年前にMC講座を受けた際にも苅宿先生の講座があり、苅宿先生のお話を聞いたのは2回目でした。1回目の時はWSというものにまず？マークの状態でメモをとるだけで精一杯でしたし、何が重要なのか飲み込むのに時間がかかりました。ですが、今回は前回に比べWSを何度も体験したおかげか講座の内容がよくわかりました。音楽WSとついていながらも、もちろん音楽でアプローチをしますが、教育の分野にWSは密接に絡んでいるのだと思いました。苅宿先生がWSはこれからの時代で必要ですし仕事になりうるとおっしゃって下さって、とても励まされ、気力が湧きました。（神戸 / ホルン /4年）

・ワークショップが注目されているとおっしゃいましたが、音楽を通じて、学校以外にどんなところでどういうふうに実際行っているのか、詳しく知りたいと思いました。（神戸 / フルート /2年）

※写真は昭和音楽大学での様子です。

平成25年度　第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第２回ミュージック・コミュニケーション講座 「アートな学び　私のアート／ワークショップ学習論」
講　師	茂木一司（群馬大学教授・美術教育）
実施日時	2013年5月29日（水）18：30～20：00
実施場所	東京音楽大学　A館地下100教室
講座の概要	第２回講座は、音楽よりもワークショップの研究と実践が先行している美術分野での実例や問題点について、美術教育を専門としてさまざまな実績を積んでこられた茂木一司先生にお話いただいた。 最初に、「青山学院ワークショップデザイナー育成プログラム」や東京大学出版会『ワークショップと学び』第１巻～第３巻についての紹介とともに、特に2000年代に入って急激に増加したワークショップの実例を画像や映像とともに解説し、ワークショップが美術館から大学や町へと場を広げてきたことに加えて、従来の思考のワクを取り払う役割を果たしてきたことが説明された。 次に、茂木先生ご自身の考え方の変化について説明された。ワークショップの普及と増加が顕著になる一方で、学校で行われている美術教育が旧来の技能主義・作品主義に偏っている現状を打開するために、まず、イメージや感性を重視した「新しい表現の学び」を追究した。具体的には、盲学校・ろう学校や特別支援学校におけるメディアアート・ワークショップから出発し、目や耳の不自由さを克服するツールとして、音を光に変えたり、絵を立体的に感じたりできるような仕組みのメディアを用いてワークショップを行った。その後苅宿俊文先生との出会いを得て、人と人とが作り出すコミュニケーションの場としての意義の重要性を痛感し、その後はメディアに頼りすぎるのではなく、協同性・身体性・即興性・自己原因性を具えたワークショップを目指すようになった。この過程から明らかになったのは、アート・ワークショップとは、①近代化社会の枠に縛られることのない自由で柔軟な学びの場、すなわち学校以外の価値観による学びの場であること、②日常の中の学びの要素に目を向け、学校教育ではカバーしきれないものを補うことが可能であること、そして③何よりも「学ぶことは楽しい」と感じられる場であるということである。この考え方に基づいて茂木先生が提案する「協同と表現のワークショップ」は、子どもたちの自己や協同性の回復を目的とした広義のアート教育であり、多文化共生社会や「コンビニ化する社会」の中で、知力だけではなく人間のさまざまな力を呼び覚まし伸ばしていく上で有効に機能する。 現代社会における問題はすべてつながっており、現代社会に有効なワークショップの学びもそれと深くかかわっている。その意味で、現代社会においてアート教育を作品や技能といった従来の視点だけから見るのではなく、コミュニケーション能力の育成という面から新たに捉えなおす必要性を強調して、講義は終了した。

〈学生のことば〉

・実際のワークショップをあまり見た事がなかったので、今回の講座を受けどんなものかヴィジョンを持てた。人が持っている意志や可能性といったものをワークショップで探す事ができる。また、新しい表現の学びができるといった点は素晴らしいと思った。ワークショップはそれを企画する人も、参加する人も生き生きさせてくれるものだと感じた。相手の事を思うという点は本当に素敵だと思った。（東京／ピアノ／３年）

・障がいの有無に関わらず、誰でもアートを通じてコミュニケーションを取り共有することができることが分かりました。ワークショップとは何かを再認識し、グループで話し合うことで違う表現や考え方を知ることができました。
（東京／ピアノ演奏家コース／３年）

・他者理解が大切である、ということに尽きると思った。一生懸命に相手の表情をとらえ、目線を合わせ、そうすることで、相手に自分の思いは伝わると感じた。つい最近、介護体験を行い、自閉症児との関わりがあり、それに通じているなと実感した。（東京／ヴァイオリン／３年）

・先生の理念である、全体の中で生かされているということ、相手を助ける気持ちを持つことがWSの学びに全てつながっていると感じました。
（東京／伴奏／院１年）

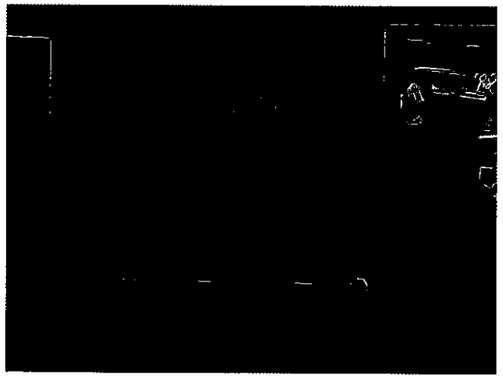
・障がいを持った子ども達との関わり方のヒントになるのではないかと思いました。
（昭和／アートマネジメント/1年）

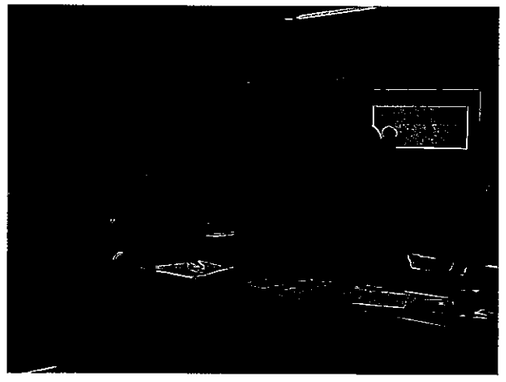
・「WS＝自分のことは差し置いて、他人を助ける」という考え方は、自分にとっては少し難しい課題だと思いました。ワクにはまるな、とよく言われますが、WSに関わることによってワクを崩していけるなら、是非参加したいと思いました。
（昭和／アートマネジメント/1年）

・茂木一司先生の講座を受けて、アートと音楽には近いものがあるので考えやすかったです。ワクへの理解の難しさや、障がい児と触れ合いワークショップをするときのお話を聞いて、もともと持つ自分のワクを壊し、壊し合いながら新しいものを作っていく大切さと相手の身になって考えることを知りました。また、みんなと意見交換をして考えていることを知り共有することができてよかったです。（神戸／オーボエ／２年）

・前回のワークショップについての講義に繋がっていました（美術のワークショップは作り方だけを示して、あとは参加者にゆだねるという話）。藤浩志さんの「かえっこ」プロジェクトは初めて知りましたが面白そうだと思いました。同じぬいぐるみが万単位というのは凄いです。作られた作品もキレイでした。世の中、色々なおもしろい美術のワークショップをやっているのだと驚きました。中学生に注目する理由に納得しました（大人と子どもの両方の部分が混ざっている）。美術のワークショップはどれも楽しそうなものばかりでした。楽しい学びが出来る＝ワークショップ。
（神戸／ピアノ／１年）

・いつもと違う目線で（美術という視点から）ワークショップのお話を聞けたので様々な発見がありました。今まで私が関わってきたワークショップは元気な子どもが相手という前提でしていたので、障がい者施設のワークショップをするとしたらどうするかな、と考えさせられました。
（神戸／打楽器／２年）





※写真は東京音楽大学での様子です。

平成25年度　第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第３回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽とメディアのデザイン」
講　師	古川　聖（東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授）
実施日時	2013年6月12日（水）18:30～20:00
実施場所	昭和音楽大学　南校舎C511階段教室
講座の概要	第３回講座は、新しいアートの形を探して、メディアを使ったワークショップを世界各国で行っている古川聖氏を講師に迎え、昭和音楽大学からの発信で実施した。 講義では、アートをめぐる現代の状況から、新しいアートのモデルとして、ワークショップが持つ可能性についてお話しいただいた。芸術における作家性、作品性、そして「アーティスト」像に捉われていたいわゆる「ポストモダン的状況」から脱却するために、コミュニケーションから生まれる創発の場が注目される。それが、新しいアートとしてのワークショップである。 古川氏とその研究室（東京芸術大学）のワークショップで展開される「感覚をひらくワークショップ」には、「触覚アートプロジェクト（視覚を使わず手で触る絵本）」、「空間ドローイングＷＳ（音で空間に形を表現）」、さらには「新しいメディアを使ったＷＳ」などがある。今回の講義では、それぞれのワークショップを実際に行った様子が、記録映像で紹介された。 中でも「新しいメディアを使ったＷＳ」は、ドイツのZKM（Center for Art and Media）で制作され、iPad/iPhoneアプリとして配布されているSmallfishというソフトウェアを用いたものである。参加者のイメージとアイディアで、絵と音がこのソフトウェアによって自由にその場で結びつく。それを構成してパフォーマンスする、という作業の中で、まさに「ワークショップをデザインする」こと、そのためにはコンセプトが根幹にあることを、実例を交えて説明していただいた。 受講した学生たちは、音楽だけではなく、人間の感覚やメディアを融合させたワークショップの実例と、それをデザインするという発想に、大きなインパクトを受けた模様であった。「ワークショップとアート」から想像するイメージを、大きく広げることができた講義となった。

〈学生のことば〉

・「ワークショップはデザインしなければいけない」というお話がありました。計画する、準備するというと固いイメージがありますが、デザインするというと芸術的な、もしくは感覚的にも出来る気がしました。（昭和 / 声楽 / 短大１年）

・目が見えない人でも手で触ったりすることで感じることができるのだとわかりました。それぞれの人に合った方法でアートを感じることができ、いいなと思いました。アートは“アーティスト”だけではなく、みんなが誰でも作り出せるものだと勉強になりました。
（昭和 / アートマネジメント /2年）

・音を耳以外で感じるということは考えたこともなかったので、新しいなと思いました。ユニバーサルデザインというのが音楽の領域にも及んできたのだなと思うと、もっとたくさんの人に“感じて”もらう努力が必要だと思います。机にかじりつきの勉強だけではなく、体と五感をフルに使った勉強が実際の生きる術としては重要になるのではないでしょうか。またそれがワークショップを開く意義なのだと思いました。（昭和 / 作曲 /2年）

・“アートのユニバーサルデザイン”という言葉に考えさせられました。障害のある人と接する機会があるのですが、必要以上に配慮、遠慮していると思います。もっと壁をとっぱらって接してみたいです。（昭和 / 声楽 /1年）

・新しいメディアやコミュニケーションツールが増える中で、アートや教育とそれらをどう活かしていくか、選択肢が多岐にわたる分、活用法も多いと感じた。「自分のアイディアを入れて世界をつくる」という言葉が印象的だった。
（東京 / 作曲 /2年）

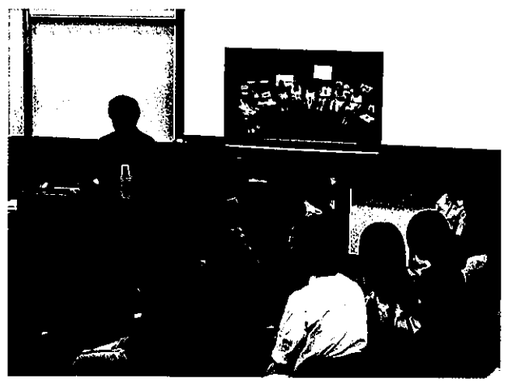
・Smallfishはアナログをデジタルに変換する面白いアートだと思いました。自ら音や絵などの素材から創り、体験者の「クリエイティブ」感が各々でも、他者でも強く感じ、伝わるので、創造への自信がつくと分かりました。（東京 / ピアノ /3年）

・デジタルなメディアに詳しくないと行えないワークショップだと思いました。将来、デジタルを使いこなせないといけない時代が来ることも考え、音楽にデジタルをプラスできるように、メディアを使えるようにしたいです。（東京 / ピアノ /3年）

・アートを感覚的に感じられる、マルチモーダルアートはアートの可能性をすごく広げられると思いました。自分の表現したい画像や絵本に音をつけて目、耳、手で感じられるアートですごいと思いました。現代のアプリを使ってワークショップをつくるのは身近にあるもので作品を作る事ができるのでいいと思いました。
（神戸 / フルート /2年）

・アルゴリズムを入れて画像を見て、すごくおもしろいと感じました。グループでコミュニケーションをとり協調性をつけ、どんな作品にしようか音を探し、絵を描いて作品をつくっていくのは、想像力もつき、いい活動だと感じました。
（神戸 / フルート /2年）

・ミュージック・コミュニケーションの中でアートを考える時「もの」としてのアートではなく、その裏にある人がする活動そのものをアートとしてとらえ考えていき、いろんな人と創造力や発想を大切にしていきたいと思いました。
（神戸 / オーボエ /2年）



※写真は昭和音楽大学での様子です。

平成25年度　第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第4回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽ワークショップの実践」
講　師	片岡祐介（作曲家・打楽器奏者）
実施日時	2013年6月26日（水）18：30～20：00
実施場所	東京音楽大学　A館地下100教室
講座の概要	第4回講座は、学校や福祉施設等で音楽ワークショップの実践を長く続けてこられた片岡祐介氏を迎え、その実例を紹介していただくとともに、画面をとおして三つの大学が同時に即興的に演奏する時間をもった。 映像を使って紹介されたプロジェクトには次のようなものがあった。 ①「子どもの鼻歌グランプリ」子どもが日常生活の中で偶然歌っている鼻歌を保護者が携帯で録音し、コンテストをする。子どもの即興的な音楽能力に目を向けると、旋律形成や反復、歌詞の付け方等、さまざまなおもしろさがある。小さい子が歌うフレーズは宝の山であり、音楽は芸術的な作品という形のみならず、実は身の回りの生活の中に宝として埋もれていることに気づく。優勝作品には、片岡氏が楽器で音を加え、PCで合成して楽曲にする。 ②「奥沢小学校の特別支援学級」6年生を送る会で歌う歌の創作。6年生について思い出す事柄を子どもたちに挙げてもらい、それを歌詞にするところから始める。子どものアイディアを抑制せず、まずは全部受けとめると皆の発想力がアップし、あまりに突飛なアイディアについては、しばらくすると子どもたちの方からやめた方がよいと言いだす。1人1人の歌声を録音し、PCで多重録音して完成。 「国分寺の小学校6年生」演劇づくりの中で、挿入歌を自作してもらい、それに片岡氏が伴奏をつけて曲に仕上げた。 ③「ポリフォニック・パーカッション」浜松市で障がいのある人たちのところに通い、毎回打楽器を思うままに演奏する時間をもつ。皆が安心した時間と空間を共有し、まったく自由に演奏しているものを全部録音しておく。最初は混とんとしているが、多くの場合20分くらい経つと皆の中に調和が生まれる。あとで録音を聞き、音楽的におもしろい部分を取り出して編集。整然と秩序に従った音楽作品ではなく、いろいろなテンポ、リズム感、キャラクター、動きをもった人々が混在してひとつのものを作りだすおもしろさがある。出来上がったＣＤはまるで現代音楽作品のように聞こえる。障がいのある人は、時として非常に個性的な感じ方やリズムを持っているので、それを聞き取り、おもしろいと感ずる感性が必要とされる。 その後、3大学それぞれ、その場で学生が楽器をもち、画面を通してお互いに聴きながら即興演奏を行った。

〈学生のことば〉

・3大学同時に楽器を演奏する、という体験がとても貴重で凄く楽しかったです。鼻歌グランプリというのもとても面白いなと思いました。
（東京／ピアノ／1年）

・みんなでリズムを適当に叩いたのが音楽になっていてとても面白かった。（東京／ピアノ／1年）

・まず、凄くおもしろかったです。「鼻歌グランプリ」の発想や子どもたちの自由な想像力に驚きました。何でもないところに素材、宝物が転がっているんだと気付きました。また、3大学中継で音楽づくりができて楽しかったです。
（東京／ピアノ演奏家コース／3年）

・子どもたちの歌がとてもキャッチーで面白いものばかりだった。（子どもたちの可能性を感じた）その場で即興的に音楽をつくることでとても一体感が生まれて、楽しい気持ちを共有できた気がした。（東京／ピアノ／3年）

・子どもたちが自然に歌った鼻歌がCMソングのようになっていて、すごく面白かったです。子どもが取り組もうとしたことを邪魔せずに、自由にやらせることによって、良い音楽ができるのが素晴らしかったです。（昭和／電子オルガン／2年）

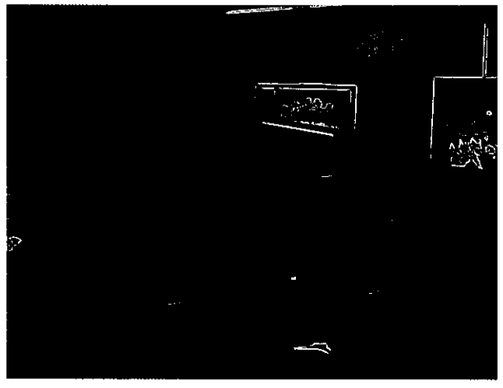
・今までの講座はワークショップを開くにあたっての知識だったが、今回は実践的な内容でイメージが割とかたまってきた。やはりパソコンや音楽ソフトの知識があった方が良いのだと思った。すぐにそれなりの形に出来上がるということは、それだけ満足感に直結するのだと思う。
（昭和／作曲／2年）

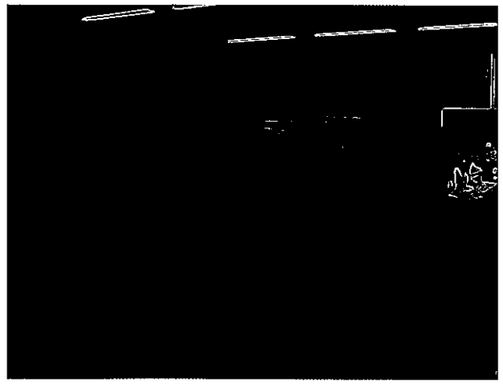
・発想はどんどん受け入れる。それから整えて創っていく。答え・正解はないのだと改めて感じました。「子どもたちから学ぶことはたくさんある」とともに「コラボする」という言葉が印象に残りました。（昭和／アートマネジメント／3年）

・今回は実際に演奏して作品を作り上げたこともあって、ワークショップのことが少し分かったような気がします。自由に演奏することの楽しさを学ぶことができました。（神戸／ピアノ／2年）

・とても面白い先生でユーモアのある授業でした。鼻歌コンテストもやっていて、子どもの発想力はすごい！と改めて感じました。また機会があればぜひ来てほしいです。（神戸／ピアノ／2年）

・子どもたちの鼻歌のコンテスト、話をきいているだけでもとても楽しかったです。「うしさんうしさん、もーもー」はもう頭から離れません。そして私も片岡先生のような活動がとてもしたいと思いました。子どもたちが作ったメロディーをアレンジして“音楽”にすることとか、絶対子どもたちはこのアレンジをきいて嬉しかっただろうな、など思いながらきいていました。もっと片岡先生のお話が聞きたいです。来年も来て下さい。
（神戸／打楽器／2年）





※写真は東京音楽大学での様子です。

平成25年度　第5回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第5回ミュージック・コミュニケーション講座 「プレイフル・シンキング」
講　師	上田信行（同志社女子大学教授）
実施日時	2013年7月10日（水）18：30～20：00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部オルチン館　合奏室
講座の概要	第5回講座は、同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授の上田信行氏を講師として招聘し、神戸女学院大学から東京音楽大学と昭和音楽大学に発信する形で実施した。その際、上田氏のゼミの学生4名がアシスタントとして同席した。 講座は上田氏がギターを掻き鳴らしながら歌う歌「Singing for you」を、まずは女学院生が共に歌うところから始まった。テレビ会議システムを介して他大学の学生にもこの歌を一フレーズずつ伝授し、3大学でユニゾンして皆の気持ちを一つにした。 次に、ミュージックビデオ作成のため、アシスタント学生4名が「call me baby」の音楽に合わせてダンスを披露し、画面を通じて他大学の受講生にも踊り方を細かくゆっくりと伝授した。テンポを速めた後、音楽に合わせて受講生たちが踊っている姿を、アシスタントがビデオで撮影した。神戸女学院大学では会場全体を撮影し、東京音楽大学と昭和音楽大学については画面越しに撮影を行った。画面のバランスやフレームアウト防止のための立ち位置まで設定し、撮影の入り方と止め方まで上田氏から詳細な説明があった。材料が揃ったところで、アシスタントはミュージックビデオの編集に取りかかった。 続いて、上田氏の著作『プレイフル・シンキング』(宣伝会議2009年)から気に入ったフレーズを書き抜いてくるという宿題の発表と議論に取り組んだ。大きなイーゼルパッド（画板サイズの台紙つきパッド）を広げて、受講生がそれぞれ書き抜いて来たフレーズをカラフルなプロッキー（ペン）で大きく書いた後、カメラに向かって1人1人が発表を行なった。「失敗とは成長過程におけるプロセスでしかない」や「見方を変えればいくらでも違った世界に見えてくる」、「How can I do it?」など印象的なフレーズが挙げられた。各大学で話し合いをした後、各大学の代表者がその結論を発表した。 ここで、さきほどの学生のダンスを撮影して編集した「ミュージックビデオ」が完成したのを全員で鑑賞した。同世代の学生が限られた時間内で編集した「ミュージックビデオ」の出来上がりに受講生は驚嘆していた。上田氏のまとめの言葉の後に、講師が普段のゼミで行っている「リアルタイム・ドキュメンタリー」の手法を用いて、アシスタントが講座中に作成した5分程度のまとめの映像を鑑賞して、本日の90分間の講座内容を振り返った。歌から始まり、ダンスやお気に入りのフレーズの話し合いまでの本日の講座内容が盛り込まれた「リアルタイム・ドキュメンタリー」に圧倒されて講義を終了した。

〈学生のことば〉

・大きな紙に好きな言葉を選んで書きましたが、きっとあれは自分に今足りないものなのだろうなと感じました。（神戸 / フルート /2年）

・恥ずかしいと思ってモジモジしているよりも、振り切ってはっちゃけて自分をさらけ出した方が楽しさも増すものだと思いました。
（神戸 / ピアノ /2年）

・とても楽しくてみんなが一瞬にして1つになれた気がして、すごく達成感もありました。上田先生のプロジェクトなど、何らかの形でこれからも関わりたいと強く思いました。
（神戸 / 打楽器 /2年）

・みんなで歌って踊っていくことで自分が積極的になれたし、心から楽しい！と思いました。「学び」は「楽しさ」の中にこそあるという先生の考えを身体で感じることができて、自分を解放して楽しむことで自分から学ぼうという姿勢になれました。（神戸 / フルート /2年）

・実際に身体を動かして体験することによって親近感も湧いて、とても楽しかった。
（東京 / 作曲 /2年）

・考え方の方向性を大きな紙にどう書くかで知ることができたのがよかったです。内容が盛り沢山だったので、最終的な方向性が分かりづらかったです。（東京 / ピアノ /4年）

・ミュージックビデオを作ったり、ディスカッションをしたりと、とても楽しかった。『プレイフル・シンキング』の本の中で、多くの人の1番共感できたところの理由を聞くことができてよかった。（東京 / ピアノ /1年）

・「もっと動いてー！」と先生が必死に呼びかけてくださることで、“カラ”を破って楽しく踊ることができました。初めに先生のお弟子さん達が踊りを見せてくれた時には、むずかしそうで怖気づきましたが、段々踊れるようになる自分を客観的に見ていると、自信を持つことができました。
（昭和 / アートマネジメント /1年）

・上田先生はとても明るいという印象が強かったです。自らミュージック・ビデオを作ってしまうなど、行動力があると思いました。
（昭和 / 声楽 / 短大1年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成25年度　第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第6回ミュージック・コミュニケーション講座 Leadership training and philosophy at the Guildhall School ＜ギルドホール音楽院のリーダーシップ教育とその考え方＞
講　師	シグルン・セヴァルスドッティル＝グリフィス（アイルランド出身） （英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのプログラム・リーダー）
実施日時	2013年10月30日（水）18：30～20：00
実施場所	神戸女学院大学文学部Ⅱ号館　マルチ・メディア教室
講座の概要	東京音楽大学、昭和音楽大学、神戸女学院大学と英国ロンドン市ギルドホール音楽院の4地点を結ぶ形でのIV会議システム接続を実現して、ロンドンからの講座を実施した。 講座は、講師の音楽歴と現在活動しているプロジェクトの概略についての説明から始まり、クリエイティブ・ラーニングに重点が置かれた。クリエイティブ・ラーニングは、ギルドホール音楽院（大学および大学院における長期研修によって、近隣の子どもから大人までの幅広い参加者を対象としたプロジェクトを集中的に学習する教育プログラムを展開している）とバービカン・センター（音楽・映画・劇場・ギャラリーなどのプロデューサーが集まりプロジェクトを企画しているヨーロッパ最大の芸術センターでギルドホール音楽院に隣接している）とが協力して展開している。地図や写真を使って、両者の位置関係やギルドホールの新キャンパスの紹介も行なわれた。 次に、具体的なプロジェクト＜The Work＞の内容が紹介された。「ワークショップ・リーダーを育てる」ことに加えて、地域的にも（学外活動など）幅広く実施しており、参加者の持っている技術（楽器や歌やダンス、その他）や興味のある事柄をどのように組み合わせるかを追求している。こうした唯一無二の作品を作り上げていく作業を＜The Work＞と名付けている。 続いて、ギルドホール音楽院のリーダーシップ・コースについて、昨年（2012）行なったプロジェクトの中から＜Curious＞と＜Dialogue＞の映像を見せて、さまざまな人種や年齢を対象としたプロジェクトであることを説明した。地域社会での活動と芸術教育との融合を長期的に考えている。アフリカやイスラエル等での「海外研修の実施」や「卒業生の進路」についても映像を用いて説明し、リーダーシップ・コースでは最終的に「学生に何を求めているか」が詳細に語られた。なお、ギルドホール音楽院では2015年9月から新しいコースが開設されるとのこと。 最後に質疑応答が行なわれ、学生からはプロジェクトの予算や資金提供について、また日本でワークショップを仕事としていくためにはどうしたらよいか、といった質問が出て、講師から懇切な返答があった。今回の講座は学生にとってロンドンで取り組まれている最先端のプロジェクトを知る貴重な機会となった。
備考	ギルドホールはIV会議システムを持ち合わせていなかったため、Polycom社が取り扱っているReal Presenceという30日間お試しのフリーソフトを使用して接続を行なった。このため安定した接続の確認ができるまでに4回の接続テストを行った。 英語による講義を、本学大学院通訳コースの中村昌宏准教授と奥村キャサリン専任講師のお二人が見事に同時通訳して下さって、受講生の理解を助けて下さったことを記して感謝する。 同時通訳に当たっては、本学マルチ・メディア教室に常備されている翻訳ブースを使用し、通訳の音声をSkypeの通信を利用して他の2大学に配信した。このように今回の講座は、技術的な要求の高いものとなった。

〈学生のことば〉

・ギルドホール音楽院の教育システムやワークショップ活動の内容などについて、詳しく知ることができて勉強になりました。実際のワークショップの様子を見て、クラシックだけでなく他ジャンルの音楽や芸術も知っていることが、ワークショップを成功させるためには必要なのだと思いました。各人ができることを合わせて1つのものを作るためには、リーダーを交代ですることや相手の意見をまず受け入れることなど、みんなで協力して取り組もうとすることが成功への近道なのだと思いました。（神戸 / ピアノ /3年）

・シグルン先生のギルドホール音楽院の講座を聞いて、ワークショップの本質のようなものを学べた気がします。ギルドホール音楽院の設備にはびっくりしました。ワークショップの働きというのは、外部の人との協力と参加によってアートを通したものであり、様々な人と行なうことによって音楽を感じて繋がっていくことの大切さを教えてくれました。何ができるかではなくその人の持っているものを引き出してあげることがいいと学びました。（神戸 / オーボエ /2年）

・イギリスからお話をして頂き、通訳つきで講座を受けられて大変貴重でした。イギリスではワークショップは大切なものだと思われていて、日本とはみんなの意識が違うと感じました。
（神戸 / ピアノ /2年）

・ピアノや自分の楽器を弾くだけでなく、たくさんの人と共有しながらみんなで即興演奏するのは楽しいし、音楽を発展させるという点でも改めてとてもよいと思いました。（東京 / ピアノ / 1年）

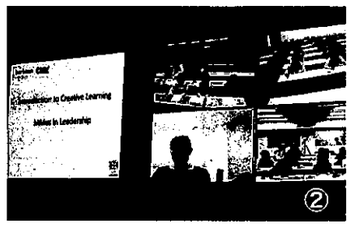
・実際の映像を見て、どのようなことを行っているのかを知ることができました。様々な分野を柔軟に取り入れることが必要だと思いました。また、継続的なスキルの向上が視野を広げることに繋がると感じました。（東京 / ピアノ / 1年）

・盛り沢山な内容で頭の中が飽和状態です。音楽だけでなく舞台や言語など異なる芸術にも触れ、コラボすることで自分の見解を広げ深められることが感じ取れました。音楽以外とコラボできる講座に参加してみたくなりました。
（東京 / ピアノ / 3年）

・"work" はただの仕事という意味の言葉だと思っていましたが、ワークショップのリーダーを育てるだけでなく、それ以上のことをするというお話が印象に残りました。先生がおっしゃっていた「学生に求めるもの」が自分には一つも備わっていないと思いました。大学にいる間に獲得できるよう努力したいです。（昭和 / 声楽 /1年）

・"Yes, and…" が大切という話、とても納得できました。（昭和 / アートマネジメント /1年）

・「芸術形式」「コラボレーション」「Yes!」など、今まで知らない世界を知ることができた授業でした。（昭和 / サクソフォーン /2年）



①通訳者：神戸女学院大学 大学院通訳コース
中村昌宏 准教授（左）
奥村キャサリン 専任講師（右）
②4地点中継の様子
③～④神戸女学院大学での様子です。

平成25年度　第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第7回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学学生10名
実施日時	2013年11月6日（水）18：30～20：00
実施場所	東京音楽大学　K館404会議室
講座の概要	7月22日・23日と9月22日で行ったワークショップについて、学生が概要を説明した。(ワークショップの概要については27～29ページを参照) 原稿や配布資料・参考映像を準備してグループで発表することは、特に1年生にとって初めての経験であり、ワークショップの内容や問題点をその場にいなかった人にわかりやすく伝えることの難しさを知る機会となった。

〈学生のことば〉

・プレゼンをするのは初めてだったので、とても緊張した。自分の意見を伝えることの難しさを感じ、事前にもっと準備をしておくべきだと思った。
（東京 / ピアノ /1年）

・ワークショップを企画中の私にとって、とても実践的なアドバイスを多数いただくことができました。また、今までワークショップに関わってこられた皆さんからは温かい励ましの言葉を頂き、勇気づけられました。（昭和 / アートマネジメント /1年）

・ワークショップの進行、内容、反省点、良かった点など、様々なことを知ったし、日本人に合ったやり方を模索する等、深く考えさせられることが多かった。（昭和 / サクソフォーン /2年）

・印象深かったのは、1人1人の子どもに役割を持たせて、自分が何をするのかを明確にすることで自己原因性を強めることができたというところです。子どもたちが積極的になり、音楽作りに関わっていくことができるというのはすごいことだと思いました。（神戸 / フルート /2年）

平成25年度　第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第8回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（昭和音楽大学）
発表者	昭和音楽大学学生2名
実施日時	2013年12月4日（水）18：30～20：00
実施場所	昭和音楽大学　南校舎C511階段教室
講座の概要	12月15日に予定している「音楽の贈り物　～みんなでつくる笑顔の時間～」の中で行う音楽ワークショップの内容と意図、問題点について、学生が報告した。(ワークショップの概要については34～35ページを参照) 作成したチラシの記載内容やワークショップの進め方について、他2大学の学生からも積極的な意見が出された。

〈学生のことば〉

・初めて自分が2大学へ発信する立場になり、とても緊張しました。また、アドバイスや質問を頂くことによって、自分のやろうとしている事柄の実態が改めて明らかになっていったと感じます。
（昭和 / アートマネジメント /1年）

・これからやるワークショップについて、すごくいろいろなことを考えていて、しっかりと経過を伝えてくださって感心しました。短い時間の中でのワークショップのつめ方や子どもたちの接し方を一緒に考えることができたのでよかったです。
（神戸 / オーボエ /2年）

・プレゼンテーション力を今後高めていくために、今回の経験と反省を活かしていきたい。
（昭和 / アートマネジメント /1年）

平成25年度　第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学学生10名
実施日時	2014年1月8日（水）18：30～20：00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部　会議室
講座の概要	11月13日～16日に神戸女学院大学で行われた音楽ワークショップ集中研修について、その内容と感想・意見について学生が報告した。(研修自体の概要については30～33ページを参照) 講師はギルドホール音楽院のシグルン・セヴァルスドッティル＝グリフィス氏で、11月13日～15日はワークショップ初心者のための導入を含めながら、少しずつ16日に用いる音楽的素材を共有し、16日には18名の子ども（5歳～12歳）を迎えて「子どものための音楽作りワークショップ」を開催した。 ワークショップでは全員による導入アイスブレイクの後、学生と子どもがグループに分かれて音楽作りに取り組み、最後には各グループが作った音楽をつなぎ合わせて一つの作品として保護者の前で発表した。 その後、リフレクション・ムービーを皆で見て子どもたちとともにフィードバックの時間をもち、さらに学生と講師との間で振り返りとディスカッションを行った。

〈学生のことば〉

・子どもと適切な距離を置くことについて考えさせられました。私は自分のワークショップで子どもと距離を取りすぎてしまったと反省しているのですが、距離を詰めすぎるのも良くないのだなと思いました。（昭和 / 声楽 /1年）

・ワークショップにおいてもグループで発表するにおいても「全員でやる」ということも大切だけれど、「1人1人や少人数で考えたものを共有して伝える」ということの大切さを知った。だから、次の時は役割を持って自発的に進めていって、もっと良いものをたくさん吸収してもっともっと経験を積んでいきたいし、伝える力、仲間を支える力量をつけたいと思います。（神戸 / オーボエ /2年）

・シグルンのリードの仕方は説明が少なく、学生どうしの心のほぐれが弱いようにも思いました。すごく進み方が早く感じたし、違う見方をすると真剣そのものという感じもしました。もちろんその姿勢も大切だと思うけれど、あと少し笑顔になれたり、単純に楽しい！という感じもワークショップにはもっとあってもいいのかなと思いました。自分が楽しいと思うから他の人にも伝えたい！と思えるのではないかと私は考えるからです。かっこいいと感じるレベル、難しいと思って諦めてしまうレベル、そして楽しいと感じる音楽、そのバランスの難しさを感じました。（東京 / ピアノ /3年）

平成25年度　第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
発表者	昭和音楽大学３名、東京音楽大学３名、神戸女学院大学３名
実施日時	2014年1月15日（水）18：30～20：00
実施場所	各校からの発表、ディスカッション形式

昭和音楽大学は、12月の「音楽の贈り物」音楽ワークショップについて、映像を用いた報告があった。

「音楽の贈り物」音楽ワークショップ（ワークショップの概要は34～35ページを参照）

時間	30分
子供の人数	全体で30人（サンタチーム９人、ゆきだるまチーム６人、トナカイチーム15人）
ファシリテーター	リーダー１人／サブリーダー２人
補佐	６人
音楽	ピアノ／サックス／パーカッション（演奏の部出演のジャズトリオ）
使用曲	赤鼻のトナカイ
ワークショップ内容	①アイスブレイク『こんにちは！』（7分） ②本編『ボディパーカッションで遊ぼう！』 （グループ練習12分、リズム発表２分、演奏者との合奏６分など：計25分）
学生のことば	・WS開始後であってもグループが均等になるよう人数整理をするなど、柔軟に対応できれば良かった。 ・演奏者との打ち合わせ時間をもう少し確保するべきであった。 ・全体的に内容が指示的なものへ傾いていたが、子ども達の自由な意見を引き出すことに成功した班もあった。 ・着ぐるみを着用することによって、子ども達に親近感を与えることができた。また、グループの特徴を理解してもらうのに役立った。 ・子ども達の音楽に対する興味が想像していた以上に高かった。 ・子ども達を信じてあげることが大切なのだと実感した。

東京音楽大学は、①東京文化会館主催事業カーザ・ダ・ムジカ　ワークショップリーダー養成講座と、②（社）全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）との連携によるワークショップについて、映像とパワーポイントを用いた報告があった。

①東京文化会館主催事業カーザ・ダ・ムジカ　ワークショップリーダー養成講座

概要	12月６日～９日に東京文化会館主催で行われたミュージックエデュケーションプログラムは、ポルトガルの公立音楽ホール「カーザ・ダ・ムジカ」から派遣された講師３名によるものであった。このホールは、ギルドホール音楽院の指導の下に独自のワークショップ指導法とレパートリーを展開しており、衣裳や小道具を用いた演劇的なワークショップ（ワークショーと称するべきか？）を特徴とする。上記講座には東京音楽大学から教員１名、学生２名が参加し、ワークショップのリードの方法や企画・実践の方法論という点で大きな刺激を受けた。 カーザ・ダ・ムジカのエデュケーションプログラムは、毎日１つのWS演目を３回、それぞれ違う年齢の子供たち、たとえば一回目は生後19か月までの子供とその親、２回目は５歳まで、３回目は７歳までと対象年齢を変えて行っている。WSに参加するにはチケット購入が必要で、チケットの値段は国家事業ということもあり、親子で15ユーロとなっている。 また、それ以外に、幼稚園に通っている子供たちが遠足のようにクラス単位などでホールを訪れてワークショップを受けたり、反対にエデュケーションプログラムのリーダーたちが学校や幼稚園、刑務所、病院に行ってワークショップを行う場合もある。 今回は「リズミカル・キッチン」「ボディ・パーカッション」「コオロギの大冒険」という３つのワークショップを子ども対象に実施し、受講生はその中に入ってそれを実際に体験することができた。 **【リズミカルキッチン】** 会場に入ると、シェフの格好をした２人のリーダーと、たくさんのキッチングッズに目を奪われる。皆でコの字型に席に着き、配られたコップやフォークを叩いたり、リズムに合わせて回したり歌ったりした。今回はリーダーの合図に従いリーダーを真似ていくことが主で、参加者の自由な表現の場はほとんどなかった。 **【ボディー・パーカッション】** ギルドホール音楽院の先生方がウォーミングアップに用いる拍手回しやリズムのコール＆リスポンス等と同じタイプのワークショップ。その場で多様なリズム型や旋律型を教えながら、複数の要素をさまざまに組み合わせていく。 **【コオロギの冒険】** 幼稚園児対象の演劇的ワークショップで、リーダーはコオロギの扮装をしており、役名はグリグリとグリラードである。積極的なグリグリとすぐ隠れてしまうグリラードが、歌を歌いながら皆と散歩に出掛け、おやつを食べて昼寝をするというストーリーになっている。リーダーは日本語が話せないため、今回は最小限の言葉がけを受講生が周囲から補ったが、かなりの部分はパントマイム的に進んでいった。一緒にいる保護者や保育士も巻き込みながら楽しませる演技力がある。音楽的には既存の曲を用いずオリジナルの楽曲を用い、しかも子ども向けの単純なものではなく、五音音階や五拍子、ビートボックス等多様な要素が含まれていることに驚かされた。
学生のことば	彼らはWSの進め方について、ＷＳの構成をしっかり持っておくこと、その構成は軸にするけれどその場その場で対応していくためのプランＢを常に持っておくことを強調していました。たとえば１時間のＷＳで最後に何をしたいのかをはっきりさせておけばそのゴールに向かってリーダーたちは細かい点は変えながらも、進めていくことができます。正直に言うと、私は何回かＷＳリーダーを経験して、ＷＳを計画するときにはいつも「ＷＳが始まればきっと何かが起きるから、それで何とかなるだろう」と思っていました。でも、ＷＳの参加者側でいたときに魔法にかかったように感じることができたのは、リーダーたちがＷＳの進め方を本当に細かく考えていて、そしてさらにそれをただ計画通りにリーダーの都合で遂行するのではなく、その場の状況に合わせて工夫・変更しながら進めていたからだとわかりました。（東京／ピアノ／３年）

②（社）全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）との連携によるワークショップ

概要	ピティナのステップ事業（ピアノ学習者が課題曲を演奏し、日常とは異なる指導者から複数のアドバイスを得る機会）の空き時間を利用して、12月21日に所沢ミューズのステップ開催中に、親子対象の45分間のワークショップをする機会を得た。 ワークショップリーダーは、東京音大2名、桐朋学園大学研究生1名（今年度の東京音楽大学特別セミナー参加者）。アイスブレイクの後、三つの音楽素材を用いてグループの組み合わせによる合奏で、クリスマスをテーマとするオリジナル曲を作り上げた。

神戸女学院大学は、学生たちのワークショップ・グループ Keep in touch について映像を用いた活動報告があった。

このグループは2012年度のミュージック・コミュニケーション講座夏期セミナーをきっかけに結成されたもので、3大学の学生を中心に19名のメンバーがいる。これまで学外では神奈川県と兵庫県で計3回のワークショップを行った。今後、卒業したメンバーを含めてどのように活動を展開するか、またどのようにしてワークショップのスキルを向上させることが可能かという点が課題であることが報告された。

Keep in touch

メンバー	神戸女学院大学　12名、東京音楽大学　2名 昭和音楽大学　3名、洗足音楽大学　2名
学生のことば	・学生たちだけでやるＷＳが楽しい。自分たちでいろいろ発見し考えながらできて楽しかった。 ・自分の専攻楽器以外の楽器を使うことで考えが広がった。 ・香りを使ったワークショップでは、個々人の感覚の差があり難しく感じたが、コミュニケーションを重ねることでイメージがつながった。 ・関東と関西の距離を超えて、団体として息の長い運営をしていくために、今後軸足をどこに置いて活動していくのかが課題である。

総括

今年度は、ワークショップの学習論や社会的意義などの理論的側面を学びながら、各大学または学外において多様な音楽ワークショップの実践の場を持つことができた。同じような体験を3大学で報告し合い共有することにより、個々の体験をその場限りのものとせず、多様な観点から振り返り、今後へ生かすことができると考えられる。ワークショップの方法には唯一の正解があるわけではなく、そこで重視される要素は文章化できたとしても、状況に応じて可変的なものである。そうした「たくさんの答えがある」学びを、同時に「楽しい学び」として、今後の各自の展開に生かしていくことが望まれる。

（武石みどり）

平成25年度 「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定

1. 平成25年度「ミュージック・コミュニケーション講座」の概要と教育効果測定

平成25年度の「ミュージック・コミュニケーション講座[1]」（以下、MC講座）は、インターネット・ビデオ会議システム（IV会議システム）による講義、各大学ごとの実践活動、そして各大学の実践活動についての報告会を中心とする枠組みで行われた。

本年度の講座では、外部招聘講師よりワークショップの理論と実践にもとづく多彩な講義をいただくとともに、各大学ごとの実践活動において、ワークショップの集中的な研修や、ワークショップを取り入れた公演づくりに参加して実地に学び、そこで得たものは報告会を通して3大学間で共有することができた。報告会では3大学の学生が活発に意見交換する場面も見られ、音楽ワークショップのより良い在り方や、今後、活動の輪を広げていくにはどうすれば良いか等、学生同士が真剣に議論し、学びを深めていた。

上記のような平成25年度MC講座について、教育効果測定を実施した。本稿では、その調査の概要及び結果を報告する。

2. 調査方法

調査は、MC講座受講前（第1回講座開始前）及び講座受講後（第15回講座終了時）に配布される「履修者調査シート」により実施した。調査対象期間は、平成25年度のMC講座（第1回ガイダンス：2013年4月17日～第10回総括：2014年1月15日）である。調査対象者は、東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学の受講生である。

3. 「履修者調査シート」回答者の内訳

調査では、講座に出席した履修者及び履修者以外の受講生（聴講等）に対し「履修者調査シート」を配布し、回答を得た。回答者の内訳は表1・表2の通りとなった。

表1　平成25年度講座開始前調査回答者の内訳

	履修				専攻			学年					計
	履修者		非履修者		A群	B群	C群	1年（短大）	2年（短大）	3年	4年	院	
	Ⅰ	Ⅱ	初めて	継続									
東京	11	2	3	0	16	0	0	9	1	5	1	0	16
神戸	5		2	1	8	0	0	1	7	0	0	0	8
昭和	3	1	3	0	6	1	0	4(1)	1(1)	0	0	0	7
合計	19	3	8	1	30	1	0	14(1)	9(1)	5	1	0	31

※A群は、器楽、声楽、作曲、ポピュラー音楽専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。C群は、舞踊専攻。

表2　平成25年度講座終了時調査回答者の内訳

	履修				専攻			学年					計
	履修者		非履修者		A群	B群	C群	1年（短大）	2年	3年	4年	院	
	Ⅰ	Ⅱ	初めて	継続									
東京	5	1	0	1	7	0	0	2	1	3	1	0	7
神戸	5		2	1	8	0	0	1	7	0	0	0	8
昭和	2	1	1	0	3	1	0	2(1)	1	0	0	0	4
合計	12	2	3	2	18	1	0	5(1)	9	3	1	0	19

※A群は、器楽、声楽、作曲、ポピュラー音楽専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。C群は、舞踊専攻。

1）ミュージック・コミュニケーション講座の詳細については、4～20ページを参照。

また、本講座は、地域社会における音楽活動の広がりを意識している点で、3大学で既設の地域音楽活動関連科目[2]と内容に関連性を持っている。そのため、本講座参加者のうち地域音楽活動関連科目の参加者を調査したところ、内訳は表3の通りであった。昨年度の同様の調査では各大学に1人から数人の参加者が見られたが、今年度は2つの大学で0人となっており、学生にとって両方の科目に参加することは、それほど必然ではない様子がうかがえる。

表3　平成25年度講座終了時調査回答者の内訳

東京音楽大学	講座終了時7人中、「アクト・プロジェクト」のメンバー0人
神戸女学院大学音楽学部	講座終了時8人中、「音楽によるアウトリーチ」履修0人
昭和音楽大学	講座終了時4人中、「アーツ・イン・コミュニティ」参加2人

4. MC講座受講生の期待と成果 ―MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅰの結果から

講座開始前の設問Ⅰでは、「履修のきっかけ」を問うことでMC講座に対する期待を、また、講座終了時の設問ⅠではMC講座で得た成果を、それぞれ選択肢の中から複数回答可として質問した。講座開始前については図1から図3に、講座終了時については図4から図6に、その結果を示す。

これらを見ると、3つの大学で、多く回答された項目は異なっている。例えば、講座開始前の東京音楽大学では、本講座に対し「将来、仕事をするときに役立ちそう」という期待が比較的大きいのに対し、神戸女学院大学、昭和音楽大学では「音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたい」、「音楽に関して幅広く知識を得たい」という期待の方がより大きい。一方、講座終了時には、東京音楽大学は「音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた」、神戸女学院大学は「将来、音楽に関わる仕事をするために役立った」、昭和音楽大学では「音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた」、「人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた」という項目を、成果として挙げる者が多い結果となった。

〈講座開始前・設問Ⅰ〉
あなたがミュージック・コミュニケーション講座を履修しようと思ったきっかけは何ですか？

図1　東京音楽大学受講生の回答　n=16、MA（%）

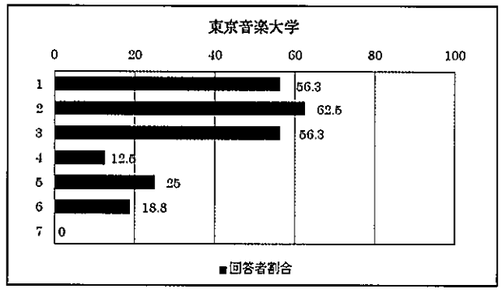


図2　神戸女学院大学受講生の回答　n=8、MA（%）

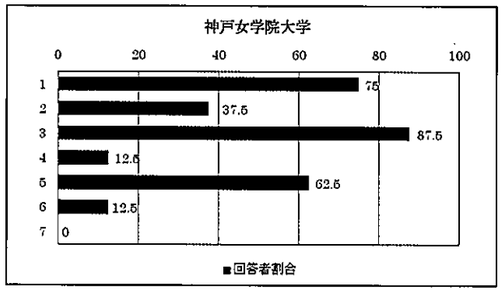
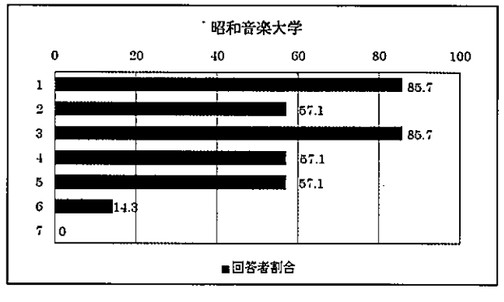


図3　昭和音楽大学受講生の回答　n=7、MA（%）



〈設問Ⅰ　選択肢（複数回答可）〉
1．音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから。
2．将来、仕事をするときに役立ちそうだから。
3．音楽に関して幅広く知識を得たいから。
4．授業の形態（Ⅳ会議システムによる3大学同時受講）に興味を持ったから。
5．他の大学の学生と交流したいから。
6．昨年も受講して、継続的に学びたいと思ったから。
7．その他（自由記述）

2）地域音楽活動（アウトリーチ活動等）やコンサートの企画・運営等を体験し修得するプログラムで、3大学各校で内容は異なるが、いずれも授業科目となっている。プログラム名は、東京音楽大学「アクト・プロジェクト」、神戸女学院大学音楽学部「音楽によるアウトリーチ」、昭和音楽大学「アーツ・イン・コミュニティ」である。

〈講座終了時・設問Ⅰ〉
あなたがミュージック・コミュニケーション講座で得た成果は何ですか？

図4　東京音楽大学受講生の回答　n=7、MA（%）

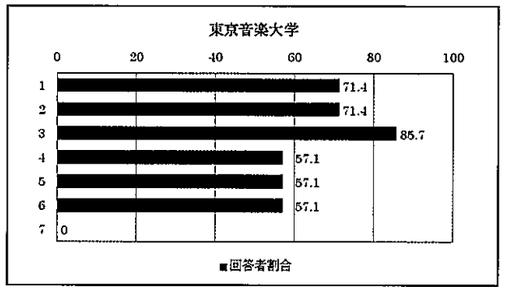


図5　神戸女学院大学受講生の回答　n=8、MA（%）

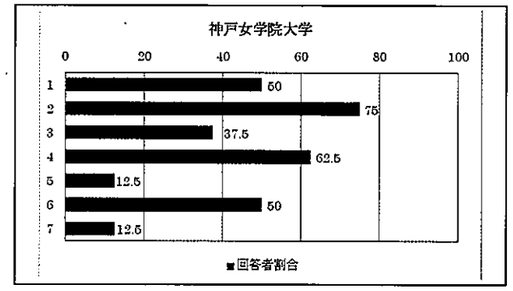
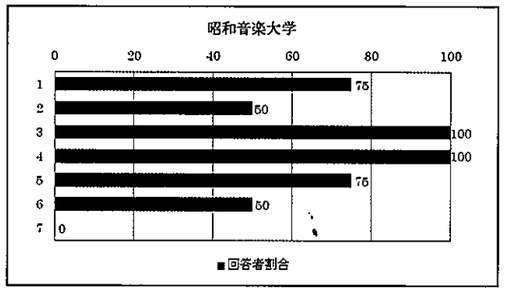


図6　昭和音楽大学受講生の回答　n=4、MA（%）



〈設問Ⅰ　選択肢（複数回答可）〉
1．音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
2．将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。
3．音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。
4．人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた。
5．インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。
6．他の大学の学生と交流することができた。
7．その他（自由記述）

5. MC講座受講生の意識・意欲の変化

次に、MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの結果から、受講生の意識や意欲の変化を見ることとしたい。

5-1. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱの結果

設問Ⅱでは、将来の活動の希望について、①音楽家②スタッフとして音楽に携わる③音楽指導者④まだわからない、の4つの選択肢で質問した。講座開始前の結果を表4に、講座終了時の結果を表5に示す。

表4と表5を比較すると、講座開始前と講座終了時の間で「1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい」という割合が減少し、「2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい」、「3. 音楽指導者として活動をしたい」という割合が増加している。特に、音楽指導者を希望する割合が増加したことは、昨年と同様の結果となっており、本講座の内容が一定の影響を与えていることが考えられる。

〈設問Ⅱ〉あなたは将来、主にどのような活動をしたいですか？

表4　講座開始前（3大学合計）　n=31

	度数（人）	割合（%）※	A群（人）	B群（人）	C群（人）
1．音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	12	38.7	12	0	0
2．スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい。	2	6.5	1	1	0
3．音楽指導者として活動をしたい。	3	9.7	3	0	0
4．まだわからない。	12	38.7	12	0	0
1と3（複数選択）	1	3.2	1	0	0
1、2、3（複数選択）	1	3.2	1	0	0

※割合は、小数点第二位以下を四捨五入。

表５　講座終了時（３大学合計）

n=19

	度数（人）	割合（%）※	A群（人）	B群（人）	C群（人）
1．音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	3	15.8	3	0	0
2．スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい。	2	10.5	2	0	0
3．音楽指導者として活動をしたい。	4	21.1	4	0	0
4．まだわからない。	8	42.1	8	0	0
1と3（複数選択）	1	5.3	1	0	0
1、2、3（複数選択）	1	5.3	0	1	0

※割合は、小数点第二位以下を四捨五入。

5-2. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅲの結果

設問Ⅲでは、自由記述により、「音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思うか」を質問した。表６は講座開始前の記述を、表７は講座終了時の記述をまとめたものである。

講座開始前に比べ、終了時は、ワークショップの経験を踏まえた記述へと変化している様子が見られる。すなわち、キーワードとしては「自分の考えをわかりやすく伝える」「相手の考えを引き出す」「相手を尊重する」等が示されている。これらのキーワードは、本講座の授業内でもしばしば重要な事柄として取り上げられたものである。

〈設問Ⅲ〉音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか？

表６　講座開始前（３大学全体）

主な記述	件数	備考
相手の気持ちや考えを受け取る力と、人に自分の意思を伝える力	8	東京・神戸・昭和
演奏を聴いてくださる方々とのコミュニケーション能力	3	東京・神戸・昭和
たくさんのことに興味を持って正しい知識を持つこと	3	東京・神戸
自分の意見や、他人の意見をまとめる能力	2	神戸
自分の表現を理解してもらうために、工夫したり説明したりすること	2	東京・昭和
積極的に自分から動き、活動し、会話できる能力	2	東京
様々な人と社交的に話せる力	2	東京・神戸
自分をアピールするためのプレゼン能力	1	東京
現状を冷静に把握し、それをわかりやすい形で共有し、伝えること	1	東京
子どもからお年寄りまで臨機応変にコミュニケーションをとること	1	東京
相手の気持ちを汲み取り、柔軟に会話していく能力	1	東京

表７　講座終了時（３大学全体）

主な記述	件数	備考
自分の考えをわかりやすく伝える能力	5	東京・神戸・昭和
他の人が考えていることを感じ取り、その人の考えを上手く引き出していく能力	3	東京・昭和
周りを見て臨機応変に対応しながらコミュニケーションをとること	2	東京・神戸
受け身ではなく、自分からチャンスを得ようとし、積極的にいろいろな人とコミュニケーションをとること	1	昭和
何事も広く受け入れる心。相手を思いやる気持ち。	1	昭和
相手の言葉をしっかり受け止めて、尊重できるようなコミュニケーション能力	1	東京
生徒の性格、能力を見極め、的確な言葉がけをする能力	1	東京
アーティスト同士のコミュニケーション能力と、そのための語彙力	1	神戸

5-3. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅳの結果

設問Ⅳでは、「音楽コミュニケーション・リーダー」の指標として、「専門力」「社会性」「コミュニケーション能力」の３つの観点に基づく15の項目を設定し、これらについて「非常にあてはまる」を5、「全くあてはまらない」を1とする5段階評価で質問した。講座開始前の結果を表８に、講座終了時の結果を表９に示す。

表８と表９の数値を比較すると、以下の５項目で0.1ポイント以上の増加が見られた。

1．ホールだけではなく、いろいろな場所で演奏や音楽活動をしたい
2．コンサートの企画をやってみたい
3．曲目を選ぶときには、聴き手のことも考えている
4．音楽を伝えるために、演奏だけではなくトークにも挑戦したい
7．音楽に関連する様々な職業に興味がある

一方で、下記の項目については、0.1ポイント以上の減少となっている。

5．コンサートのつくり方やマネジメントを学んでみたい
11．広く多くの人と、コミュニケーションすることが好きである
14．周りの人と協力して物事に取り組むことができる

この結果によれば、0.1ポイント以上増加した項目は、「専門力」に関する項目が４項目（1～4）、「社会性」に関する項目が１項目（7）であった。これは、「社会性」「コミュニケーション能力」に関する項目が多く挙がった昨年度の結果に対し、異なる結果となっている。その背景としては、今年度の講座において各大学ごとに実践活動を行い、その中で音楽ワークショップを専門的に学んだことも影響していると考えられる。

また、0.1ポイント以上減少した項目のうち、特に「コミュニケーション能力」に関する項目（11、14）は、本講座においても重視すべき項目と言えよう。これらの項目については、今後の講座運営の中で、改善点を検討することが必要であろう。

〈設問Ⅳ〉

表８　講座開始前（３大学合計）

n=31

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	20	7	10	9	13	21	16	20	6	19	10	5	17	13	3
4	9	17	10	9	11	7	10	10	10	8	12	12	10	15	12
3	1	3	7	10	5	1	3	0	10	3	6	12	4	1	9
2	0	4	3	2	2	1	1	0	4	1	3	2	0	2	6
1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1
数値平均	4.52	3.87	3.81	3.74	4.13	4.48	4.26	4.55	3.52	4.45	3.94	3.65	4.42	4.26	3.32

※数値平均は、小数点第三位以下を四捨五入。

表９　講座終了時（３大学合計）　n=19

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	17	8	11	7	8	11	14	11	4	12	5	5	9	6	4
4	1	7	5	7	4	6	5	7	6	4	7	6	9	7	3
3	1	4	2	3	6	1	0	1	6	2	3	4	1	4	8
2	0	0	1	2	1	2	0	0	3	1	4	4	0	2	4
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
数値平均	4.84	4.21	4.37	4.00	4.00	4.53	4.74	4.53	3.58	4.42	3.68	3.63	4.42	3.89	3.37

※数値平均は、小数点第三位以下を四捨五入。講座開始前よりも 0.1 ポイント以上の変動があったものに網掛け。

今年度の MC 講座受講生は、学年では 1、2 年生が中心となってはいるが、表に表れていない各回ごとの聴講生も含めて既習の 3、4 年生も加わっており、様々な専攻、学年の混合であった。このようなメンバーの中で、時には上級生が持つ経験値を共有しながら、ワークショップの実践や振り返りが行われ、意見交換が活発かつ意義深いものとなった。

前章までに見てきた教育効果測定の結果には、今年度の講座運営の特徴が随所に表れていると言えよう。すなわち、ワークショップの理論と実践を学ぶ中で、子どもに対する指導者としての役割についての気づきや、音楽活動における聴き手や周りの人とのコミュニケーションの在り方について、学生たちが意識して考えるようになった様子が見られる。

その一方で、ワークショップにやや傾斜した回答となっているため、広い意味でのコミュニケーションに視野を向けることができたかどうか、講座において再検討する余地があろう。

本報告の終わりに、MC 講座を受講した学生の感想を以下に掲載する。

（佐藤良子）

「ミュージック・コミュニケーション講座」を受講しての感想（自由記述）

・ワークショップのことを、この授業を受けるまでよくわかっていなかったので、新しいことをたくさん学べてすごく勉強になったと思います。ワークショップにも興味が持てて、これから積極的に関わっていけたらと思います。普段はなかなか聞くことのできない先生方の講義を聞けたり、「音楽の贈り物」にたずさわれたりと、様々な経験をさせていただけて、この授業を履修して良かったと思います。（昭和 / 声楽 /1 年）

・今まで人前で緊張しながらピアノの演奏をするということしかなかったので、アウトリーチ、ワークショップという新しい形の音楽に出会うことができて本当に良かったと思います。この授業を受けた事によって、当たり前のことですが相手の思っていることを考える、ということが大事だと改めて思いました。受講して良かったです。（神戸 / ピアノ /2 年）

・この講座を受講して初めてワークショップに触れることができました。音楽に関わらず "ワークショップ" というもの自体が初めてだったので、目から鱗だらけでした。様々な活動を専門の先生方から学んだり、3 大学でのそれぞれの体験を聞いたりできたことが、視野を広げることに役立ちました。また、実際にワークショップに参加することで、なかなか接する機会のない小学生とコミュニケーションをとることができて良かったです。普段できない体験をたくさんすることができました！！（東京 / ピアノ /3 年）

音楽ワークショップ 「ようこそ音戯 (おとぎ) の島へ♪」

平成 25 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	音楽ワークショップ 「ようこそ音戯 (おとぎ) の島へ♪」 ～身近にある音を使ってみんなで音楽をつくりませんか～
実施日時	2013 年 7 月 22 日（月）13：30 ～ 15：00 2013 年 7 月 23 日（火）13：30 ～ 15：00
実施場所	豊島区　区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生で 2 日とも参加できる人（参加者数 26 名）
主催	東京音楽大学 3 大学連携センター
共催	豊島区立地域区民ひろば南池袋・豊島区立子どもスキップ南池袋

〈事業概要〉

夏休みに入ったばかりの小学生を対象に、2 日連続でワークショップを行い、空想の島をイメージして音楽作りに取り組んだ。

事前の授業では、企画提案とディスカッション、企画書の作成に取り組み、チラシは企画者の大学院生がデザインした。またアイスブレイクの種類やリードの方法について、学生どうしで何度も練習した。事後の授業では、ワークショップの記録の作成、報告書の作成と口頭報告の原稿と資料づくりに取り組んだ。ワークショップ当日の参加学生数は 14 名。

◆ 7 月 22 日

＊アイスブレイク…30 分

・大きな円の形になり、拍手回し、リーダーの動きをまねする、リズムをたたく（子どもたちの体、心をほぐしていくことが目的）等。

・そのなかで、後にグループワークで作る音楽の中で「つなぎの音楽」となる部分の素材をつくり、共有する。

＊グループワーク…60 分

こどもたちを次の 4 つのグループに分け、テーマをもとに音楽づくりを進める。

①インディアンの広場　②人魚が歌う湖

③風が吹く谷　④海賊たちの酒場

◆ 7 月 23 日

＊アイスブレイク　＊グループワーク　＊発表

＊振り返り、感想、アンケート記入等

・つなぎの音楽は、" 音戯の島をまわる→船で移動する " というアイディアに基づき、6/8 拍子の旋律をあらかじめ作っておく。その旋律を子どもたちと共有し、その音楽が聞こえたら作業をやめて全体集合するというルールにする。

・発表の時には、つなぎの音楽を、各グループの作品の間に挟んで演奏することで、グループで作った音楽をさらに 1 つの大きな作品にして皆で共有する。

〈学生のことば〉

・授業であらかじめ練習を重ねてあったが、本番になって、子どもたちが予想外の行動や反応を示したときに焦ってしまい、柔軟な対応ができなかった。1 日目に、多少粗暴な行動をする男の子が他の子といさかいを起こしてしまった時には、対処の仕方がわからず真剣に向き合うことができなかった。1 日目の振り返りののち、2 日目には同じ子どもに徹底して付き添い、特別な役割を与えて一緒に演奏することができた。恥ずかしくて自分を出せない子どもや、反発して音楽に興味を示さない子どもへの対処も、2 日目には改善することができた。（ピアノ / 1 年）

・音楽のことよりも子どもの扱いに気を取られたのと並行して、音楽のアイディアを出す際に子供が戸惑ってしまうと、学生の側で誘導しすぎてしまい、子どもの自発性を摘み取ってしまったと感じる場面もあった。（ピアノ / 3 年）

以上の点より、①リーダーと補助者との柔軟性、②補助者がリーダーをサポートすること、③子ども一人一人に目を配ること、④納得解にこだわること　の 4 点が今後のワークショップにおける課題となった。

東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座　特別セミナー

平成 25 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座　特別セミナー 音楽ワークショップ 「ワンダー・アンサンブル　みんなのアイディアで、わくわく音楽づくり！」
講師	石黒加須美（かすみピアノスクール主宰、ピティナ名古屋支部長） 東　瑛子（音楽ワークショップリーダー、神戸女学院大学大学院・ギルドホール音楽院リーダーシップ大学院修了）
実施日時	2013 年 9 月 21 日（土）～ 9 月 22 日（日）
実施場所	東京音楽大学 A 館
主催	東京音楽大学 3 大学連携センター
後援	豊島区（22 日の音楽ワークショップのみ）
参加者数	東京音楽大学 11 名、神戸女学院大学 3 名、昭和音楽大学 1 名 外部参加者 5 名、小学生 24 名（22 日のみ）

〈事業概要〉

◆ 9 月 21 日

10：00 ～ 11：00 導入講義

「音楽ワークショップ実践に向けて」武石みどり

従前のミュージック・コミュニケーション講座で論じられてきたワークショップについての理論的基盤を確認しながら、音楽ワークショップの場合に求められる能力と音楽性について、これまでの経験をベースにまとめ、問題を提示した。

11：00 ～ 12：00 プレゼンテーション

「@ Japanese WS なう」坂本夏樹（東京音楽大学大学院生）

今日本で音楽ワークショップを実践しようとするとき、どのような場があり、それがどのような組織によって支えられているのかという点について、企業や団体、組織に取材した結果を報告した。

13：00 ～ 14：00 プレゼンテーション

「音楽指導者の心得」石黒加須美

「LINK!! 新しい意味の発見」東　瑛子

14：00 ～ 15：30

わらべうたや詩を用いたワークショップ　石黒加須美

わらべうたの歌詞を文節ごとに分けてカードに記し、カードの組み合わせを考えたり、他のわらべうたと並列したりして遊びながら、ことばのおもしろさや音組織の類似に気づかせる。谷川俊太郎の詩を朗読し、一節ごとに音楽化して一連の曲を作り上げる。

15：30 ～ 17：00

ギルドホール音楽院の方法によるワークショップ

東　瑛子

言葉による説明をほとんど用いず、複数のリズムや旋律の要素を体で覚え、少しずつグループを細分化して複雑な構成の音楽へと進む。

17：30 ～ 19：00　懇親会

◆ 9 月 22 日

10：00 ～ 12：00

午後のワークショップのための準備・グループワーク

13：00 ～ 15：30

音楽ワークショップ「ワンダー・アンサンブル」

今回の音楽ワークショップでは、抽象的なものを音楽で表すことをめざし、テーマとして「過去・現在・未来」を設定して、3 グループに分かれて音楽づくりに取り組んだ。全体のリーダーは東瑛子氏で、3 グループのリーダーは昨年 2 月に本講座より派遣されてギルドホール音楽院でワークショップ実習に参加してきた廣瀬紀衣・増田明日香（ともに神戸女学院大学）と磯野恵美・大西小百合(東京音楽大学)が務めた。リーダー 5 名は前々からテーマと音楽素材について打ち合わせを行ってきたが、ここで他の学生たちとコンセプトを共有する作業を行い、実際に子どもに対応しながら各グループの創作を進めた。

15：30 ～ 16：15

出来上がった作品の発表と振り返り

16：30 ～ 18：00

ディスカッション・総括

事前に準備した音楽素材やアイディアを子どもたちに伝える時に、リーダー側が考えていたのと異なる受けとめ方をした場合の柔軟な対応方法、自分勝手な行動をしたり心を開こうとしない子どもたちへの対応方法に苦労した。スムーズに進まなかった点があった分、ディスカッションは大変白熱したものとなった。また子どもと対応していく中でリーダーとそれを支えるサポーターがどのように相互協力できるのか、学生一人ひとりがある程度独自の判断を求められる一方で、常に全体の動きや仕上がりにも配慮すべきであることの難しさが指摘された。ワークショップリーダーとしての経験の有無やリーディングへの熱意の個人差を感じながら、参加者はそれぞれ自分の果たした役割を振り返り、今後の課題を明確にすることができた。

〈学生のことば〉

- 今回はギルドホールのやり方だけでなく、石黒先生の手法も学ぶことができて良かった。わらべ歌や言葉遊びをアイスブレイクで取り入れたい。（ホルン / 4 年）
- その場その場にどうやってコミットしていくか。自分の当事者感覚を強くするにはどういう心持をすればよいか、その点を考えていきたい。（外部参加者）
- 積極的になったと思う。子どもたちのことを考えて、どうしたら自己原因性を見いだしてもらえるかを真剣に考えた。（ピアノ / 3 年）
- 楽しむことが大切。周りを見てどのように接したら良いのか、進めていけば良いのか、判断力の大切さを学んだ。（ピアノ / 3 年）
- セミナーで学んだことは、WS だけでなく、人との関わりにも活かせそうです。もっと周りに目を配ることができるようになりたいです。（ピアノ / 1 年）

参加者へのアンケート集計結果

	1	2	3	4	5	無回答
①自分のアイディアや感じたことが皆に伝わるよう工夫した。	1	4	2	2	0	1
②ディスカッション等で、意見を積極的に述べた。	1	3	4	2	0	0
③同じグループになったメンバーと十分にコミュニケーションを取りながら共同作業ができた	1	3	5	1	0	0
④参加者（講師を含む）の誰とでも自分からすすんで交流した	2	2	5	1	0	0
⑤子どもたちをリードしながら一緒に音楽を作ることができた	2	4	3	1	0	0
⑥どのグループもリーダーのもと皆が参加する意識を持って行動できた	5	5	0	0	0	0
⑦メンバーどうしが積極的に意見を述べ合った。	1	9	0	0	0	0
⑧一人一人のアイディアを活かし、発展させていく努力をした。	2	7	1	0	0	0

※ 1 ＝非常によくできた、2 ＝まあまあ、3 ＝どちらともいえない、4 ＝あまりできなかった、5 ＝まったくできなかった

アンケート結果から、自分の考えを伝えコミュニケーションを取ることについて、学生自身がまだ十分力を発揮できていないと意識していることがわかる。しかし、設問⑥～⑧にあるように、グループ内での仲間意識や積極性については肯定的な自己評価が見られる。この結果から、今後、グループワークをより有効に機能させていく工夫が必要と考えられる。

ワークショップの様子

参加者と講師での集合写真（懇親会にて）

音楽ワークショップ集中研修ならびに
第４回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 25 年度　実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	音楽ワークショップ集中研修ならびに 第４回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	シグルン・セヴァルスドッティル＝グリフィス（英国ロンドン市ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのプログラム・リーダー）
RTV による指導	曽和　具之（神戸芸術工科大学准教授）　※ RTV ＝ Real Time Video
企画・司会	津上　智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時	2013 年 11 月 13 日（水）～ 14 日（木）18：20 ～ 20：00、11 月 15 日（金）17：15 ～ 20：00、11 月 16 日（土）9：30 ～ 16：00 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	13 日～ 14 日　神戸女学院大学音楽館ホール、 15 日～ 16 日　神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館スタジオ A
参加費	卒業生および一般の参加者：4 日間参加：5.000 円、15 日～ 16 日参加：4.000 円、16 日のみ参加：3.000 円（その他　1 コマ 1.000 円） ※神戸女学院生、3 大学連携事業ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生（卒業生含む）は無料 16 日子ども参加：無料
主催	神戸女学院大学音楽学部
協力	英国ロンドン市ギルドホール音楽院、東京音楽大学、昭和音楽大学
後援	兵庫県教育委員会　阪神教育事務所
参加者数	11 月 13 日～ 15 日　神戸女学院生 27 名（1 年生 4 名、2 年生 10 名、3 年生 9 名、4 年生 4 名）、学外者 11 名（女子学生 5 名、男子学生 4 名、一般 2 名） 11 月 16 日：神戸女学院生 27 名（同上）、学外者 10 名（女子学生 5 名、男子学生 2 名、一般 3 名）、子ども 18 名（5 歳 2 名、6 歳 2 名、7 歳 8 名、8 歳 1 名、9 歳 2 名、10 歳 1 名、11 歳 1 名、12 歳 1 名） 教員・スタッフ 7 名、逐次通訳 5 名（院生 3 名、指導教員 2 名）、映像撮影 2 名

〈事業概要〉

本事業の目的は、人間に備わる音楽的な創造性についての認識を深め、個々人の内に眠る音楽的なアイディアを引き出して、互いの声を聞き合うことで有意義な構築物へと組みあげるための音楽的なリーダーシップのスキルを学ぶことである。

そのため、2013 年 11 月 13 日からの 4 日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのプログラム・リーダーであるシグルン・セヴァルスドッティル＝グリフィス氏を日本に招聘し、音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）集中研修を実施した。

11 月 13 日から 15 日までの 3 日間は学生対象の研修を計 4 コマ、最終日の 11 月 16 日には学生の学びの仕上げの場として、子どもたちを交えた形で、第 4 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施し、参加するこどもの募集や当日の来場者の対応はアウトリーチ・センターのスタッフが行った）。

3 日間のワークショップ研修では、毎回全員で 1 つの大きな輪をつくり、身体をほぐしたり手拍子や息の音を隣の人に回したりするアイス・ブレイクから開始された。シグルンが歌うメロディを学生が模倣し、ユニゾンから輪唱へと発展させていくことも行なった。

1 コマ目は楽器を使わず、ボディ・パーカッションでリズムを叩き、そこにシグルンのオリジナルの歌のメロディを重ねたり、グループ毎にスイッチして入れ替わったりする活動を行った。続いてグループに分かれ、グループ毎にオリジナルの歌のメロディを作った上で、その歌をお互いに披露し合った。

2 コマ目以降、毎時間の後半は、楽器を用いてのグループによる音楽作りを行なった。歌や楽器（各自の専攻楽器や小物打楽器など）を手に 4 つのグループに分かれ (歌 / パーカッション / 旋律楽器群 / ベース楽器群)、前半のアイス・ブレイクに全員で共有したメロディや歌を基に、メンバーでアイディアを出し合いながら自分たちの音楽を作っていった。その後、できた曲を全員の前でグループ順に発表して聞き合い、シグルンの指示で組み合わせながら音楽的に発展させていき、一繋がりの作品へと組み上げていった。各グループの多彩なアイディアに笑ったり驚いたりする場面も見受けられた。11 月 15 日の 3 コマ目と 4 コマ目では東京からの男女学生も参加し、空気が一変した。新しいメンバーと今までの研修内容を共有し、最終日に向けての準備を進めていった。

最終日の 11 月 16 日には、5 歳から 12 歳までの子ども 18 名を交えて、第 4 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を行なった。ここでは、前日までの研修でワークショップを学んだ学生たちがシグルンの指導の下、子どもたちと音楽作りを行なった。ヴァイオリン、チェロ、ピアニカ、リコーダー、鉄琴など各自持ち寄った楽器を手に、子どもたちも音楽作りに参加した。

まず、子どもたちの緊張をほぐすためのアイス・ブレイクが行われた。参加者全員で 1 つの大きな輪になり、手足や声などを使って気持ちを集中させた。「ハッ！」というリーダーの掛け声に合わせて全員で動きと声を合わせるアイス・ブレイクの際に、参加者の男の子（5 歳）がリーダー役になった。いつ掛け声を合わせるか分からない緊張した空気の後、男の子が笑顔で「ハッ！」と言い、全員が声を合わせた時、会場が和やかな空気に包まれた。

この後は楽器毎のグループに分かれて音楽作りを始めた。作品のベースは 3 日間の研修のメロディを使用し、新たな部分やメロディを子どもたちと学生で作りあげていく。学生は研修のメロディを頭の隅におきながら、子どもたちから新たなリズムやメロディを引き出そうと努力していた。なかなか子どもから意見が出なかったり、逆に一人の子どもから集中的に意見が出て他の子どもたちの意見が聞けなかったり、学生が苦労している場面もあったが、昼食時に学生と子どもたちがグループ毎に昼食をとって遊んだことで、子どもの緊張もほぐれたようだった。小休憩の時には、他の楽器に興味を示して、学生に楽器を触らせてほしいと頼む子どもや、学生と一緒に遊ぶ子ども、熱心に練習を続ける子どもなどが見られた。

午後からは各グループの創作の成果を発表し合った後、それらを組み合わせて大きな作品へと発展させていった。各部分を仕上げながらシグルンは様々な指示をグループやメンバーに与え、より良い作品にしようと追求していた。

作品発表の時間になると、保護者が観客席に戻ってきた。半日ぶりに親の姿を見た子どもの中には、安心した様子の子どもや、逆に発表の緊張が増した子どもも見受けられた。シグルンの指揮で「DuDuDa DuDuDa・・・」という 6 拍子のコーラスから始まり、歌グループが作詞した歌に続いて、ピアノとパーカッションのリズムへと音楽は移っていった。打楽器パートでは、音楽作りから練習していた子どもが打楽器グループを指揮する場面もあり、それに続いて弦楽器・管楽器、さらに歌グループを重ねることで音楽をどんどん積み重ねていった。ハープのアルペジオを挟んで、次の展開へと進み、子どもが自分の好きなタイミングでトーンチャイムを鳴らす幻想的な雰囲気の中、学生は研修で作った無拍子のコーラスのみのメロディをグループ毎に重ねていった。コーラスが終わると子どもたちのトーンチャイムの音だけが残り、最後はフェードアウトして終わった。客席から盛んな拍手があり、参加者は何度もお辞儀をしていた。

その後、グループごとに学生と子どもたちで一日の振り返りをし、さらに RTV（リアル・タイム・ヴィデオ）によるリフレクションが神戸芸術工科大学曽和具之准教授によって行われた。これは朝の会場の様子からアイス・ブレイク、グループワーク、全体セッション、作品発表までの活動を撮影

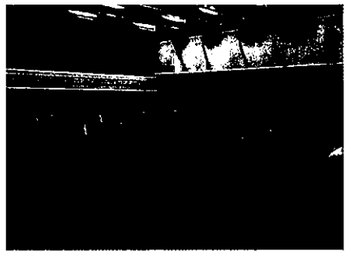
して全体で３分程度の映像にまとめたもので、上映後には会場から大きな歓声が沸き起こった。

子どもたちを帰した後、学生たちと指導陣で研修全体および最終日について質疑応答とディスカッションを行なった。学生からは、「音楽作りの時に急に音楽を作ろうとすると行き詰るから、まずは朝ごはんの話から初めて子どもとなかよくなり、朝食のメニューからの連想でリズム作りをして音にしていった」といった体験や、「最初『不安』と言っていた子どもが別れる時には『次もまた来たい』と言っていた」や「『目と耳と口と頭と心は使ったけれど、鼻は使わなかったね』という子どもがいた」といった印象的なエピソードが披露されて共有された。また「音楽作りをする時に、どうやって子どもからアイディアを引き出すのがいいのか」や「決まり事を作りすぎると自由な発想を生み出せないが、自由すぎるのもまとまらないからどうしたらよいのか」といった質問が多数出された。反省点として、子どもに許してよいことと悪いことがあり、特に楽器の扱いについてはきちんと注意すべきといった点が挙がった。シグルンからは休憩時間に子どもが自由にはしゃぎ回ったり、学生や大人が子どもに触れたりといったことは英国社会では考えられないとの指摘があった。今後、2014年２月に日本側の学生６名を英国ギルドホール音楽院に派遣して、同校のリーダーシップ・コースの活動に関わらせる予定である。

なお、本学大学院通訳コースの院生３名と指導教員２名が逐次通訳で、講師と子どもたちとの相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。

〈学生のことば〉

- 普段は書かれている音符やコードを見て弾くことが多く、何もない所から皆で作っていくのはむずかしかったけれど、おもしろかったです。自分では、自分で作った和音等こんな音楽で良いのか？と思っていたけれど、シグルン先生が「very nice」とか「fantastic」とか言ってくれたのでうれしかったです。子どもたちがワークショップに参加する意義というのは、大学生と楽しく楽器を弾くということよりも、皆のアイディアを持ち寄ってひとつの音楽を作ることだという話を聞いたとき、なるほどと思いました。（ピアノ /3 年）
- 視野の狭さ、楽器を大切に扱ってもらおうとすること、考える点がたくさんありました。これからもまたワークショップの経験を積んで学んでいきたいです。（ピアノ /2 年）
- 普段触れる機会が少ない、６拍子や独特な雰囲気のメロディのモチーフなどを用いるのがおもしろかった。ワークショップの「自由」な部分の線引き、区別がむずかしいと感じた。（声楽 /1 年）
- 音楽を楽しむことを思い出させてくれるギルドホール流のワークショップに再び参加できたことをうれしく思います。勉強しているクラシック音楽でも作曲家それぞれに個性や作品を感じますが、ワークショップ・リーダーにおいても同じであると思いました。シグルン先生のリーダーシップは、近現代の作曲家に向かっている時に感じるような、抽象的で不思議な空間に入ったような気持になりました。（ピアノ /3 年）
- 今回の集中研修をうけて、新しいアイス・ブレイクや、音楽の作り方を学べたと思います。自分の恥ずかしがりと自分には無理と言う精神を感じてしまって、まだまだワークショップに対する考えの甘さを感じて、少し後悔があったと思いました。反省もたくさんあって、これからまたワークショップでちゃんと活かしてどんどん成長していきたいと思いました。（オーボエ /2 年）
- 頭で考えずに、口にメロディを出しみんなで共有することが大切で、どんどん自分の意見を出していかなければならないと思いました。（ピアノ /3 年）
- 今回は前回と違う楽しさや新しい見方に気付けた気がします。ハープが主軸だったのもあり、あまり子どもたちへの気配りなどができなかったのが、自分の中の反省点です。（ハープ /2 年）
- 人見知りをしてしまい意見を言えなかったけれど、あまり考えすぎず、何となくでも行動してみればよかったと思います。歌だったり楽器だったりで、リズムやメロディをつくり出してみんなのものを組み合わせると、想像できないものができるというのを少しでも感じられたので参加してよかったです。もっと音楽ワークショップについて知りたいと思います。（ピアノ /1 年）
- 普段少人数の環境で決まったことをしているので、考えることが少なかったのですが、今回はいろいろな人と関わることで、コミュニケーションの大切さや、頭をやわらかくして人の考えを知ることの大切さを学びました。ある程度の枠組みの中でどのように自由を与えるのか、どのようにして子どもを巻き込むかがむずかしいと思います。またみんなの志の高さに衝撃を受けました。（声楽 /3 年）
- ワークショップは初体験で、最初は戸惑いもありました。即興も初めてで不安でしたが、みんなと音楽を作り、完成させていくことに、喜びを感じました。いつも学んでいるクラシックは楽譜を見て忠実に演奏しますが、楽譜がなくて耳で覚えて真似することは、私にはむずかしかったですが、その時とても集中していることに後で気づきました。（声楽 /3 年）
- 私たちより子どもの方が、すぐに面白いものを作りだしてくると思いました。子どもたちは「リズムを作って」と言われるとリズムだけを考えてくれる、そしてそこで考えたリズムを他のメロディと合わせると、あまり考えつかないようなものができるので、私は子どもたちからもっとヒントをもらいたいと思いました。ワークショップを実際に体験したことで、気付いたことやワークショップの本質がわかりました。（ピアノ /1 年）
- グループワークはすんなりと入っていくことができで、始めは話さなかった子どもが口を開くようになっていく所が見られ、「鼻以外全部使ったよ！」とうれしい言葉を聞くことができてよかった。子どもへの対応力、触れ合い方など多くの改善点はあるが、個人的にワークショップと演奏面の共通点を見つけて納得できたことがあったので、反省点にしても良い点にしてもたくさんのことを得られたワークショップだった。（ホルン /4 年）
- 子どもたちが混ざると自分を開放できて楽しめましたが、子どもたちとの距離の取り方の指摘もあり、迷いながら終わりました。ワークショップは改めてむずかしいと感じましたが、子どもを迎えにきた親が「この子がこんなに明るく楽しそうにしているなんて珍しいんですよ！」と子どもの変化に驚いていたので、この音楽ワークショップは子どもたちの心を何かしら変えたのだと実感できてうれしかったです。（ピアノ /4 年）



音楽の贈り物～みんなでつくる笑顔の時間（ひととき）～in 昭和音楽大学 2013

平成 25 年度　実習報告（昭和音楽大学）

事業名称	音楽の贈り物～みんなでつくる笑顔の時間（ひととき）～in 昭和音楽大学 2013
ワークショップファシリテーター	音楽コミュニケーション①②履修者および活動登録者 4 名、他 2 名
実施日時	2013 年 12 月 15 日（日）15:00~16:30 ※うちワークショップは 16:00~16:30 の 30 分間
実施場所	昭和音楽大学南校舎 C103（オーケストラスタジオ）
主催	昭和音楽大学コミュニケーションセンター
後援	「音楽のまち・かわさき」推進協議会 NPO 法人「しんゆり・芸術のまちづくり」フォーラム
参加者数	91 名（子ども 46 名、大人 45 名） ※うちワークショップ参加者は子ども 30 名

〈事業概要〉

本学の「アーツ・イン・コミュニティ」プログラムの一環として毎年クリスマスの時期に実施している『音楽の贈り物』は、今年で 6 回目となる事業で、地域の子ども達を対象とし、学生たちが企画運営をおこなうものである。今回は「奏でて、見つけて、感じよう」という全体テーマに沿って、楽器体験（プレイベントとして実施）、演奏会、ワークショップを盛り込んだ。

ワークショップの部は、ミュージックコミュニケーション（本学科目名：音楽コミュニケーション①②）の履修者および登録者が中心となり、内容の検討を重ねていった。企画者は 1 年生が多く、ワークショップを経験したことがない学生も含まれていたが、昨年も同科目を履修した 2 年生 1 名が、ワークショップの経験もあることからアドバイザー役となって企画を進めていった。本ワークショップは、単独の催しではなく、楽器体験および鑑賞を含んだ企画の一部として実施したため、時間や場所の制約がある中でアクティビティ内容を検討しなければならなかった。ファシリテーターを担当する学生たちは話し合いを重ね、今回の目的は「子どもに音楽をより身近に感じてもらうこと」とし、挨拶、拍手、歩行などの身近な言葉や動きを取り入れ、だれでも身体一つで音楽を始めることが出来ると感じてもらう内容とした。なお、当日ワークショップに参加した子どもは小学校低学年が中心であった。

はじめに、参加者全員で 1 つの大きな輪になり、アイスブレイクとして「こんにちは！」という挨拶を用いたコール＆レスポンスをおこなった。ファシリテーターのリードに従って、大きな声やささやくような声を使いジェスチャーを交えながら挨拶をした。身体をほぐした後に、全員による手拍子から次第にボディ・パーカッションへとうつっていった。全体で簡単なリズムパターンをいくつか体験して、次に 3 つのグループ（サンタ、トナカイ、雪だるま）に分かれ、グループごとにボディ・パーカッションによるリズム創作をおこなった。各グループにファシリテーター役の学生と補助役の学生が入り、それぞれのグループ名にちなんだリズムについて子どもたちと考えた。出来上がったリズムは「赤鼻のトナカイ」の演奏に合わせてやってみることを計画していたため、ファシリテーターは拍子や長さの範囲をあらかじめ決めてリズムを考えるようにしていた。

それぞれのグループが創ったリズムを順番に発表し、最後に「赤鼻のトナカイ」の生演奏（ジャズトリオによる演奏）に合わせて、ファシリテーターの合図のもと各グループが自分たちのリズムで参加した。短時間で、子ども達とコミュニケーションを図り、リズムを創り出し、全員で演奏に参加するというところまで完結させるのは学生にとっては大きな挑戦であったが、皆で音楽を作り出す楽しさや一体感、達成感を感じてもらえたようだった。

実施後は反省会をおこない、改善すべき点、よかった点などを共有した。また、1 月に本学内でおこなわれた「アーツ・イン・コミュニティ」プログラムの活動報告会において、プレゼンテーションをおこなった。初めてワークショップのファシリテーターを経験する学生が多かったが、苦労しただけ学ぶものも多かったようだ。

〈学生のことば〉

・今回の企画メンバーは、私よりも学年が 1 つ下で、ワークショップ未経験者が多かったですが、神戸女学院でのワークショップの映像を観たり、私の体験したことを話したりして、イメージを共有したことで、本番は私が想像していた以上に良いものとなりました。子ども達が積極的に楽しそうに話す姿や子ども達の意見を取り入れてリズムを創ることができたのは素晴らしいことだと感じました。（サクソフォーン / 2 年）

・このワークショップは、私にとってワークショップの価値と良さを再認識させてもらえる部分が多くありました。話し合いの場を多く設け、イメージトレーニングや実践の回数が多ければ多いほど、よりよいものになっていくのだろうと感じました。（サクソフォーン /2 年）

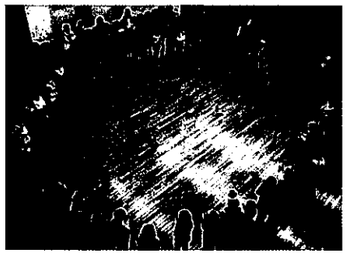
・ワークショップ企画のリーダーを務めましたが、リーダーの役割について考えさせられました。1 人で仕事を抱えてしまうのはなく、また、他者との協力がいかに大切であるかを学びました。問題を一緒に解決すること、心のケアやコミュニケーションが円滑な企画運営に欠かせない要素であると実感しました。企画スタッフがお互いにおもいやりを持ち合い、フォローしていくことで、本番をむかえることができたと思います。この経験を今後に活かしていきたいです。

（アートマネジメント /1 年）

・ワークショップは何がおこるか分からないものであるので、様々なシチュエーションに備えて準備を重ねました。雪だるまチームで出来上がったリズムが、想定していなかったものでしたが、臨機応変に対応し、素敵なリズムに仕上がっていてとてもよかったです。（アートマネジメント /1 年）

・ワークショップの内容を考える段階で、最初は何も分からない状態でしたが、みんなで話し合って、少しずつ考えていくうちに、意見交換ができるようになっていきました。自分が考えもしないような意見が他の人から出てきたので、自分ももっと考える力が必要だと感じました。当日は、子どもたちが楽しそうに参加してくれたのでよかったです。初めて 1 から企画運営することを経験できたので、今後に活かしていきたいと思います。

（アートマネジメント /1 年）



英国ギルドホール音楽院への学生派遣

～「ダイアローグ・フェスティバル 2014」参加報告～

＜ロンドンへの学生派遣プロジェクトについて＞

３大学連携では昨（2012）年度、初めて英国ロンドン市ギルドホール音楽院との学生交換を実現した。2012 年秋に英国からの２名を神戸女学院大学に受け入れて、ワークショップ研修と邦楽（箏と三味線）体験レッスンを行い、2013 年２月に日本人学生３名をロンドンへ派遣して、ギルドホール音楽院のプロジェクトに体験参加する機会を与えた（詳細は昨年度の報告書参照）。

２年目の今年度は、英国からの院生招聘の話を進めていたところ、思いがけずギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのプロジェクト・リーダーであるシグルン・グリフィス氏が自ら来日すると申し出て、2013 年 11 月に神戸女学院大学でグリフィス氏の指導によるワークショップ研修が実現した（本書 30 ～ 33 ページ参照）。その際、今年度の学生のロンドン派遣についても直接話をして了解を得たが、日本からの学生はいずれにしても各プロジェクトの途中から参加する形になるので、一つのプロジェクトに多数のゲスト学生が集中するのは進行の妨げになるため、人数調整を神戸女学院側が責任をもって行なうという条件つきで受け入れるという話になった。

これを受けて、３大学側で派遣学生の選出を行い、下記の６名を 2014 年２月にロンドンに派遣した。

今年度派遣の学生（計６名）

廣瀬紀衣（神戸女学院大学、４年生、フルート専攻）
増田明日香（神戸女学院大学、４年生、ホルン専攻）
　参加期間２月 13 ～ 19 日（7 日間）
樋口成香（神戸女学院大学、２年生、オーボエ専攻）
大西小百合（東京音楽大学、３年生、ピアノ専攻）
本田翔子（洗足学園音楽大学、3 年生、クラリネット専攻）
桜井しおり（桐朋学園大学、研究科 1 年生、ピアノ専攻）
　参加期間２月 16 ～ 25 日（10 日間）

これを見ると分るように、３大学の学生に限らず、神戸および東京でのワークショップ研修に参加した者でロンドン行きを希望する者から広く選んだ。日本での音楽ワークショップ活動の活性化を願ってのことである。

これらの学生６人は、英国ロンドン市で行なわれた「ダイアローグ・フェスティバル 2014」（ギルドホール音楽院＆バービカン・センター主催）の一環として、「メッセンジャー」「フューチャー・バンド」「アルケストラ」の３つのプロジェクトに体験参加した。その概要と参加学生の感想を以下に掲げる。

なお、本来であれば、外部の学生はギルドホール音楽院で行なわれる夏期の有料講習に参加すべきところ、2007 年以来の交流の実績を認めて、3 大学連携の日本人学生にこのような特別の機会を与えてくれたギルドホール音楽院の関係者、特にギルドホール音楽院＆バービカン・センターの教育プログラム長のショーン・グレゴリー氏、ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのプロジェクト・リーダーのシグルン・グリフィス氏、そして学生の送迎や練習室の手配等で親身に世話をしてくれたギルドホール音楽院リーダーシップ・コースのホセ・マーティンス氏に感謝する。

（津上智実）

1）「メッセンジャー Messenger」
（リーダー：シグルン・グリフィス）
セッションへの参加期間：２月 17 日～ 20 日
舞台発表日：２月 25 日
参加者：21 人（ホームレス６名、ギルドホールの学生と卒業生 12 名、日本からの学生３名）

昨年に引き続き、ホームレスの支援団体 St.Mungo's の呼びかけによって集まったホームレス及びホームレス支援者と一緒に活動するワークショップ。ホームレスと呼ばれる参加者には、参加のための交通費や食事の配給も行われた。

このプロジェクトにはギルドホールの学生と卒業生計 12 名が参加し、そこに日本からの学生３名が加わった。昨年の実施時に演奏された曲や、事前に学生たちとリーダーで作っておいた曲に、現場で新しいメロディーやハーモニー、ソロなどの要素を加えていった。参加者は各々自分が演奏したいパートを受け持ち、ギルドホールの学生も主専攻とは違う楽器を演奏したり歌を歌ったりして、多種多様で自由な空間であった。全員でセッションしていて、パートごとにシェアやアレンジが必要だとリーダーが判断した時や、学生側から打ち合わせがしたいという要望が出た時には、別の部屋に行って何度も同じメロディーを繰り返して演奏しながらシェアをしたり、ハーモニーをつけたりして、グループで音楽作りを行う時間もあった。

全体セッション中、リーダーは参加者のアイディアを取り入れつつ、まとまりを維持しながら、次から次へと流れを止めることなく進めていた。参加者はリピーターが多いためか、体の中に音楽が染み込んでいるようで、即興を自主的に組み込んでいた。

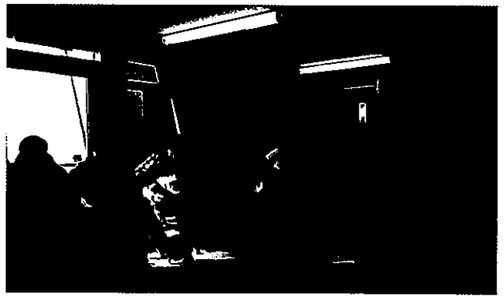
最終日の発表は、新築されたばかりの新校舎ミルトン・コートのメインホールで行なわれた（昨年はフェローズ・コートで開催）。聴衆として、ホームレスの参加者の家族や知り合い、他のプログラム参加者などが来ていた。まずリハーサルで入念に構成の確認を行なってから本番へ。本番中、打ち合わせとは違うことも起ったが、互いに支え合い、リーダーを信頼し、アイコンタクトを取りながら進行していった。どの参加者も役割が与えられ、彼らなりに役目を果たすことで、自己原因性を感じつつ、心から音楽を楽しんでいて充実した時間であった。

〈参加学生の感想〉

リーダーと参加者との関わりを見て、信頼関係が非常に大切だと思った。リーダーは参加者が出すどんな意見でも（形は少し変えたとしても）取り入れる等、必ず何らかの形で反応していた。あらゆる意見に対して、リーダーはもちろん参加者やサポートの人達も褒める姿勢が印象的だった。独特なリズムやメロディーで、最初はなかなか慣れることができなかったが、一旦慣れると音楽に表情がつけやすい素材だと分った。リーダーから即興でのソロを指示されたギルドホールの学生もすぐに反応して演奏していたのが刺激的だった。日本に比べて個人の意見がはっきりしていて発言が多かったので、みんなで作り上げているように感じた。何よりも全員が心からセッションを楽しんでいるように見えた。（樋口）

常に発言しやすい空気があり、音楽が流れ、留まることなく純粋にみんなで音楽を作ろうとし、より良いものにしたいという共通の思いを感じることができた。前に立って指示を出すのは一人のリーダーだったが、ずっと指揮し続けるのではなく、リズム・セクションに任せる場面やギターのソロに任せる場面など、任せる時は任せ、必要な時には分りやすく確実に指揮を取っていた。指揮がスムーズに進むには回りのサポートが必要不可欠であり、信頼関係の上にサポートがあるからこそできると実感した。理想的なリードの取り方を実際に見聞することができた。（増田）

参加者のホームレスと呼ばれる人々は、一般的に考えられる住居を持たない浮浪者とは限らず、何らかの形で社会に溶け込めていないとされる人たちだった。しかし、共に参加し関わりを持っていくと、彼らがそういった区別をされてしまう人たちのようには感じられなかった。おそらく感じる想いが強く、自分を表現する方法が少し不器用なだけだろう。私はこれらの人々と共に、同じ目線で音楽を通じて関わり合えたことを幸せに感じている。今回のプロジェクト全体を通して印象的だったことは、その場にいた人が皆それぞれ輝いていたことである。音楽という場に様々な人が集まって身を置き、共に一つの音楽の中にいる喜びを感じていたように思う。（本田）



2）「フューチャー・バンド Future Band」
（リーダー：デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ）
セッションへの参加期間：2月17日～20日
舞台発表日：2月25日
参加者：43名程度（子ども20名程、ギルドホールの学生10名、日本からの学生3名）

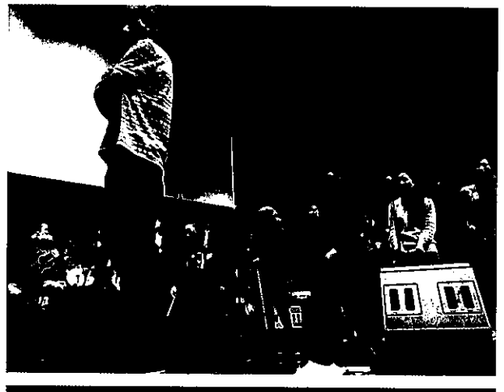
風の名前など、自然のものをテーマにしながら子どもたちからアイディアを引き出してグループで音楽を作っていく長期的・定期的プロジェクト。リーダーが提示したリズムやメロディーを共有して、そこから子どもたちとアレンジを加えていったり、グループワークでは、各グループに写真やキーワードを渡して、作りたい音楽のイメージを基に楽器の種類別に音楽の素材を作っていったりした。その際、各グループには必ず1人以上のファシリテーターがついていた。各グループで作られた素材は、全体でシェアした後、リーダーとファシリテーターのミーティングを経て、さらに展開されていった。

デッタとナターシャのリードの仕方を見ると、大袈裟なアクションによる指揮、子どもに質問しながら合図の確認を何度も行なって、合図を明確にし、各セクションとのアイコンタクトも密にとっていた。

〈参加学生の感想〉

参加の子どもたちは、リーダーが提示したメロディーやリズムに対する反応がよく、むずかしいものにもついていこうとする気持ちが高い。楽器を演奏する際も、使う音名とリズムを伝えるだけで、メロディー・パターンを繰り返していればすぐに飲みこんで一緒に演奏できるようになっていて、その音楽的能力の高さに驚いた。前半の2日間休んでいてメロディーを初めて聞く子どもに対しては、一から教え直すのではなく「何度か聞いて入っておいで」と言っていた。無茶だと思ったが、その子どもは音を聞いて音を探し、自力で情報を得ていた。まずは本人の力で挑戦させてみて、助けが必要と判断した場合は、簡単な内容に変更するのではなく「We can do it」と励まし、どうしたらマスターしやすいのかとヒントを与えていた。そこには子どもに対するリーダーたちの信頼が感じられた。毎日のワークが始まる前と終わった後には、リーダーたちが必ずミーティングをしていた。グループワークで部屋が分かれる前にも30秒程話し合うなど、リーダー同士の繋がりが強い。お互いの意見やアイディアをすぐに交換・共有することで、合奏中それぞれが離れていてもリーダーやファシリテーターとの連携がうまくいって、バンド全体が一つになっているのを感じた。できた素材に対して、それを何と組み合わせたら素敵なものになるか、即座に判断して指示・構想ができるデッタとナターシャの音楽の力には圧倒されるばかりだった。経験あるのみだが、創造する能力、素材に反応して即興で音楽を添えられる能力は、音楽作りで必要となってくるものだと思った。（廣瀬）

リーダーたちが即興能力に優れていて、どんな素材がきても組み合わせてしまう力を持っていた。一瞬変かもしれないという所も何回かやってみて、変だったら変えるというように、考え込むよりもまずはやってみて、「かっこいい」と言葉にすることを行なっていた。文化の違いを強く感じた部分もあったが、日本においてもまずはワークショップ・リーダーから肯定することを習慣づけると共に、参加した子どもたちを、少しでも自己肯定できて、自発的に意見を述べ、他人を認めて協働していけるような人に育てる場としてワークショップを役立てたいと思った。（大西）



3）「アルケストラ Arkestra」
（リーダー：ポール・グリフィス）
セッションへの参加期間：2月23日・24日
舞台発表日：2月25日
参加者：16名程（一般8名、ギルドホールの学生4名、日本からの学生4名）

15歳から30歳すぎまでと年齢幅の広い参加者が、一定のベース・メロディーに乗って即興演奏し、音楽作りを楽しむワークショップ。参加した時にはすでにベースとなるバック・ミュージック（キーボード、ギター、パーカッション）が仕上がっている状態で、管楽器、弦楽器、歌のメンバーで作った素材をバック・ミュージックに重ねていった。さらにフルート、トランペット、歌、パーカッション、アルトサックス、ベースが各場面でソロ演奏をするという構成だった。歌以外のソロ演奏は即興だったので、即興の能力が求められるプログラムだった。

23日に行なった素材作りは、全体的にアンニュイなシャンソンのような曲の雰囲気から考えて作り始めた。シークエンスが入っていたり、弱起からだったりと少々複雑な構成だった。24日は、素材をどのように曲の場面に入れるかをみんなで考え、それらを繋げることを行なって、通しのリハーサルをした。参加者はギルドホールの学生とバービカン・アカデミーの学生が多く、少ない人数なのにこんなにすばらしいオーケストラができるなんて凄い！とリーダーのポールが褒めていた。

発表の当日は、開場と同時にアルケストラのテーマ音楽を演奏し、大方の入場を確認した後で、本題の演奏に入った。

〈参加学生の感想〉

私は歌の担当で、メンバーは私を含め3名だった。その内1名はギルドホールの学生で、すでにソロの部分は仕上がっていた。素材作りの時には、大半がギルドホールの学生によって進められたが、私達日本人学生にも何かメロディーは浮かばないか？歌ってみて？というように意見を求めて、それをアレンジして皆で作った。ギルドホールの学生やバービカン・アカデミーの生徒が多いので、音楽的な内容も高く、ソロの演奏にも慣れていると感じた。2回のセッションに参加して、学ぶことがたくさんあった。ただ、歌は管楽器のメロディーに被せる形だったので、何か楽器を持参すればよかったと思った。（桜井）

ギルドホールの学生の助け合いが多く見られたチームだった。新たにメロディーを作る時、1人ずつ思いつくままに演奏し、音を探している時に聴こえてきたよいフレーズを繋げていった。その後、フレーズの順番を考え、ベースに合うリズムへと変えていった。基本的にみんなの意見を聞き、意見を出し合いながら進んでいった。最終日まで、ハーモニーや構成の練り上げを続けた。誰かが弾いているところに重ねて演奏していく中で自然にセッションが始まったのが印象的だった。（樋口）

おわりに

音楽を学ぶ学生の「専門力」、「コミュニケーション力」、「社会性」を磨き、社会のさまざまな場で音楽活動を創造・実践する「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成を目指して平成21年度にスタートした、音楽系３大学（東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学）の連携プロジェクトは、今年で５年目を迎えました。今年度もこの報告書をまとめることが出来て、大変うれしく思います。

「ミュージック・コミュニケーション講座」では、ロンドンのギルドホール音楽院と４地点を結ぶ形での講義が実現しました。また、学生達が共同で曲作りやミュージックビデオを作成したり、さらに新しい試みとして、各大学が行っている実践活動を互いに報告する場を設けて活発な意見交換を行ったりと、まさに「インターネット・ビデオ会議システム」をフル活用した授業を行うことが出来ました。

本年度は３大学の学生が合流しての夏期セミナーを実施出来ませんでしたが、９月と11月に東京と神戸で行われた研修に他大学の学生達が参加するなど、自主的な交流が生まれました。また、昨年よりスタートしたギルドホール音楽院との学生交流についても、2014年２月に再訪英が実現するなど、地に足がついた着実な活動の広がりが見られた年でした。

この５年間に、社会における音楽･芸術の役割はますます重要になり、このプロジェクトから巣立った学生たちも社会で活動しはじめました。この取組を支えてくださっている３大学の関係者、連携センターや連携ルームのスタッフをはじめ、関係の皆様に心より御礼申し上げますとともに、これからも３つの大学が連携を深めながら、より進化したプログラムとなるよう努力したいと思います。

平成26年３月

音楽系３大学連携事業　取組担当者
武濤京子
（昭和音楽大学音楽学部・教授）

音楽系３大学による共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成25年度　活動報告書

平成26年３月　発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒171-8540　東京都豊島区南池袋3-4-5
Tel:03-3982-3513 Fax:03-3982-3227

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター
昭和音楽大学　連携ルーム

装丁･表紙･本文デザイン　上條浩史